基礎ゼミの学修ポートフォリオ（平成25年度版）

1）自主的な学習態度を獲得すること	事前評価
	中間評価
	事後評価
2）問題発見能力を高めること	事前評価
	中間評価
	事後評価
3）資料（情報）の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること	事前評価
	中間評価
	事後評価
4）基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること	事前評価
	中間評価
	事後評価
5）学生と担当教員、および学生相互におけるコミュニケーションの場を作りだすこと	事前評価
	中間評価
	事後評価
6）安全で健康的な学生生活を送るための基礎知識を習得すること	事前評価
	中間評価
	事後評価
7）下記の質問から、二つ選び、回答してください。 A） どの項目が自分の最も良い成果ですか？ それはなぜですか？ B） どの項目が自分の最も重要な成果ですか？ それはなぜですか？ C） どの項目が自分の最も満足な成果ですか？ それはなぜですか？ D） どの項目が自分の最も不満足な成果ですか？ それはなぜですか？ E） どの項目への取組が自分を最も成長させましたか？ それはなぜですか？	

学修ポートフォリオで工夫した点

- 学生の自己省察を深め，自らの成長を把握できるように，二つの工夫を行った。
  1. 事前，中間，事後評価の欄を設けた。
  2. 自己省察の結果を再考してもらうために，問7を設けた。

例えば，「どの項目が自分の最も良い成果ですか？それはなぜですか？」という問いに答えるには，身につけた能力の価値を各項目で比較し，順位付けしなければならない。また，その理由を他者に分かりやすく説明するには，その理解を深めなければならない。

基礎ゼミのルーブリック（平成25年度版）

達成目標	評価（尺度） 秀	優	良	可	不可
①自主的な学習態度を獲得すること	授業内容や、関連する新たな知識や技能に対して興味・関心を持ち、常に自主的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心を持ち、常に自主的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心を持ち、時々自主的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心を持つものの、あまり自主的に学ぶことができない。	自主的に学ぶことが全くできない。
②資料（情報）の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること	関連する情報を適切な方法で検索し、必要かつ信頼できる情報を集め、活用しやすい内容に整理できる。	関連する情報を適切な方法で検索し、必要かつ信頼できる情報を収集できるが、活用しやすい内容に整理できない。	関連する情報を適切な方法で検索し、必要な情報を収集できるが、信頼できない内容が含まれている。	関連する情報を適切な方法で検索できるが、必要な情報を収集できない。	関連する情報を適切な方法で検索できない。
③問題発見能力を高めること	適切な思考法を活用して、重要度の高い新たな課題を発見し、その解決の必要性を説明できる。	適切な思考法を活用して、新たな課題を発見し、その解決の必要性を説明できる。	適切な思考法を活用して、新たな課題を発見できるが、その解決の必要性を説明できない。	適切な思考法を活用できるが、新たな課題を発見できない。	適切な思考法を活用できない。
④基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること	自らの考えをレポートや口頭発表で正確に、かつ分かりやすく説明でき、批判に反論もできる。	自らの考えをレポートや口頭発表で正確に、かつ分かりやすく説明できるが、批判に反論できない。	自らの考えをレポートや口頭発表で正確に説明できるが、分かりにくい点が多い。	自らの考えをレポートや口頭発表で説明できるが、不正確な内容が多い。	自らの考えをレポートや口頭発表で説明できない。
⑤同僚や教員と良好なコミュニケーションをとれること	他者の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自らの意見を述べ、建設的な人間関係を構築できる。	他者の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自らの意見を述べられるが、建設的な人間関係を構築できない。	他者の意見を聞き、その内容を理解できるが、積極的に自らの意見を述べられない。	他者の意見を聞き、その内容を理解できるが、自らの意見を述べられない。	他者の意見を聞くことができない。
⑥社会の規則を遵守し、安全で健康的な学生生活を送ること	社会のルールやマナーを理解し、遵守した上で、規則的な生活習慣を継続的に実施し、自らが模範となれる。	社会のルールやマナーを理解し、遵守した上で、規則的な生活習慣を継続的に実施できる。	社会のルールやマナーを理解し、遵守した上で、規則的な生活習慣を断続的ながら実施できる。	社会のルールやマナーを理解し、遵守するものの、規則的な生活習慣を実施できない。	社会のルールやマナーを守らない。

ルーブリックの作成

- 基礎ゼミの達成目標をそのまま評価項目に用いた。
  - その後，要素に分解した方が良いのではという意見が出てくる。
- 評価の尺度は，5段階（秀，優，良，可，不可）とした。
- 特徴の記述は，最低限修得すべき特徴を可の欄に記述した。そして，不可はその特徴を修得できなかった場合とし，良より上の尺度では，一つずつ，難易度の高い特徴を付加していく方法を採用した。
  - 学生が自己評価しやすいための工夫。
  - しかし，その後批判も出てくる。

ルーブリックの定義（の確認）

- ルーブリックの定義（文部科学省）
  - 米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。

出典：中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」，37頁。

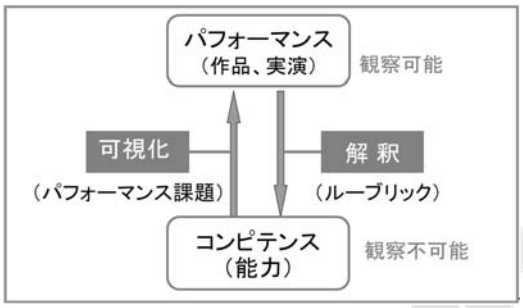
パフォーマンス評価

アクティブラーニングの評価

- 従来の評価方法（ペーパーテスト）では測りにくい，学修態度（パフォーマンス）として表現される能力を測るために，パフォーマンス評価などを用いる。
- パフォーマンス評価は，松下（2013: 13）によると，フィギュアスケートの採点方法などに近い。
  - 数分間、実際に演技させる。
  - 複数の専門家（審査員）が評価基準に従って採点する。

出典：松下佳代（2013）「学習成果の評価の方法―パフォーマンス評価を中心に―」平成25年度（第16回）弘前大学FDワークショップ，13頁。

パフォーマンス評価の概念図



出典：松下佳代（2013）「学習成果の評価の方法―パフォーマンス評価を中心に―」平成25年度（第16回）弘前大学FDワークショップ，11頁。

基礎ゼミでのパフォーマンス評価

- 基礎ゼミでは，学生が自らのパフォーマンスを自己評価することとした。
  - 教員が各自のパフォーマンスを評価するわけではない。
- よって，「可視化」のツールは，学修ポートフォリオで，「解釈」のツールは，ルーブリックとなる。
  - ここで学修ポートフォリオの定義を再確認したい。

学修ポートフォリオの定義

- 学修ポートフォリオの定義（文部科学省）
  - 学生が、学修過程ならびに各種の学修成果を長期にわたって収集し、記録したもの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図るという、学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させることを目的とする。

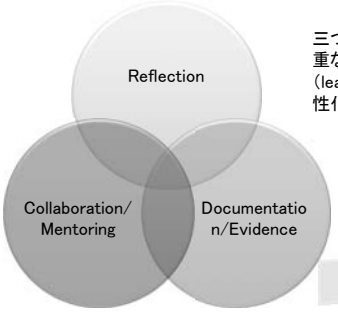
出典：中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」，38頁。

学修ポートフォリオの情報

- 自律的な学修を深化させるために，学修ポートフォリオに，どのような情報が記載されるべきだろうか。
- 学修ポートフォリオは，その利用目的に応じて多様な情報が記載され，様々な形態が採用される。
- ジョン・ズビザレタ（John Zubizarreta 2009：23）は，いかなる目的で作成する場合でも，必ず含むべき要素があると主張している。その要素とは，下記の三つである。
  - 「自己省察」（reflection）
  - 「証拠書類」（documentation）
  - 「同僚の助言」（collaboration）

出典：Zubizarreta, John (2009) *The Learning Portfolio: Reflective Practice for Improving Student Learning,* second edition, San Francisco: Jossey-Bass.

ラーニング・ポートフォリオの概念図



三つの要素（円）が重なる箇所で学修（learning）が最も活性化される。

出典：Zubizarreta, John (2009) *The Learning Portfolio: Reflective Practice for Improving Student Learning, second edition,* San Francisco: Jossey-Bass. p.25.

学生の学修の飛躍の判断

- 教員が学修ポートフォリオを活用して判断すべき，学生の（特にパフォーマンスとして示される）学修の飛躍は，授業期間終了後の最終的な学力というより，授業期間中の学力の伸びである。
- なぜなら，従来の学期末考査（到達度評価）で測れなかった学修過程を評価できるところに学修ポートフォリオの利点があるためである。
- 特に，学力が伸張した（到達目標を満たせた）理由を，学修ポートフォリオの自己評価の記述で判断できることは特筆に値する（田中 2013）。

出典：田中正弘（2013）「ラーニング・ポートフォリオ（学修業績記録）とは」『文部科学教育通信』2013年4月22日号，30-32頁。

学修過程の評価の例（1）

- 弘前大学教養教育科目「国際社会を考える（D）」において，医学部の学生が提出したポートフォリオによると，
  - 指定図書を読むことでも高い割合で学ぶことはできたが，講義を受け，先生の説明を聞くことで理解をより深めることができた。また，先生自身のフィードバックにより，他の学生の考え方を知ることで自分の考えと対比することができた。これら二つの要因により，混沌とした自分の考えをまとめることができ，指定図書を読んだだけでは理解できなかったことが理解できた（金光 2009：225）。
- この学生は，自らの学力が伸びた理由を自己評価で簡潔に説明できていることが分かる。

出典：金光綾香（2009）「ラーニング・ポートフォリオ～授業を通じて得たこと・考えたこと～」土持ゲーリー法一（編）『ラーニング・ポートフォリオ　学習改善の秘訣』東信堂，224-226頁。

学修過程の評価の例（2）

- さらに，彼女は否定的な自己評価も書き添えている。
  - この授業の主体をなしているグループ・ディスカッションではあまり学ぶことはできなかった。これは，私自身がグループ・ディスカッションに積極的に参加できなかったことが要因である（金光 2009：225）。
- 自分の学力を正しく評価できている学生は，自らに残された課題を見つけられている。このため，自主的な学修で自らの学力を伸ばしていける学生だと期待できる。
  - 学修ポートフォリオは，このような学生を高く評価できる。
- さらに，学生の反省点（否定的な評価）は，教員の反省点（今後の課題）にもなる。

意図せざる望ましい学修成果

- 学修ポートフォリオでは，意図せざる望ましい学修成果を発見することもできる。たとえば，先述の授業で，教育学部の学生が提出したポートフォリオに，以下の記述がある。
  - この授業では，毎回図書館に行って指定図書を読み，課題を行ってから授業に参加することが求められていたので，毎週図書館に行くことが習慣となった。そのことは，なかなか図書館に足を運ぶ機会のなかった私にとって図書館をより身近なものにしてくれた（岡本 2009：233）。
- この学修成果は授業の到達目標に書かれていないが，大学生にとって，身につけるべき重要な学修態度の一つであろう。

岡本美里（2009）「ラーニング・ポートフォリオ～『国際社会を考える（D）』を通して～」土持ゲーリー法一（編）『ラーニング・ポートフォリオ 学習改善の秘訣』東信堂，230-234頁。

ルーブリックの見直し

ルーブリックの見直し

- 平成25年度に試行されたルーブリックは，基礎ゼミの学修ポートフォリオに記載されたパフォーマンスを，学生がコンピテンスに解釈するためのツールとして開発された。
- しかし残念ながら，ポートフォリオもルーブリックも，普及が進まなかった。
- そこで，平成28年度の教養教育改革に合わせて，基礎ゼミの内容見直しと，ルーブリックの作り直しを行うこととなった。

新しい教養教育の目的

- 主体的・能動的学習への転換
  - 基礎ゼミの見直し
- 文理融合教育による多元的な視点や思考法の獲得
  - 地域学ゼミの導入（COC関連）
- 国際共通語としての英語能力の獲得
- 地域志向性（地域が持つ強みや課題の理解，課題解決への意欲等）の涵養
- 国際性（異文化理解，多文化共生等）の涵養

新しい基礎ゼミの位置づけ

- 正解のある問題をいかに解いていくかという「学び」から，自ら問題を発見し考え，解を求め続ける「学び」へと，質的な「学びの転換」を図ることが必要となる。
- そのため，「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」を積極的に導入し、ブレインストーミングやKJ法等を活用したロジカルシンキングの体験を通して思考法の獲得等を目指す。

新しい基礎ゼミの達成目標

① 自主的な学習態度を獲得すること
② 資料(情報)の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること
③ 課題発見能力を高めること
④ 基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること
⑤ 学生と担当教員、および学生相互におけるコミュニケーションをとれること
⑥ 安全で健康的な学生生活を送ることができること

新しい基礎ゼミのルーブリック

達成目標	評価対象	評価 4	3	2	1	0	重み	得点
①主体的な学習態度を獲得すること	①学習への自主性	指示された以上に自発的に学習できる	指示に応じて、自らの力で学習できる	教員等から多少の助力を得て、学習を進められる	教員等から助力を得て、学習を進められる	学習を進められない	2	
②資料(情報)の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること	②-1検索・収集	必要な情報と関連情報を豊富に集めることができる	必要な情報を集めることができる	必要な情報をある程度集めることができる	必要な情報をあまり集められない	必要な情報を集められない	1	
	②-2理解・整理	情報の理解・整理が十分できる	情報の理解・整理ができる	情報の理解・整理にやや問題がある	情報の理解・整理にかなり問題がある	情報を理解・整理できない	1	
③課題発見能力を高めること	③分析	多様で重要な課題を見出せる	重要な課題を見出せる	重要性がさほど高くない課題を見出せる	課題の要素を見出せる	課題を見出せない	2	
④基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること	④-1報告書作成	内容と体裁が優れた報告書を作成できる	内容と体裁にはほぼ問題がない報告書を作成できる	内容と体裁にやや問題がある報告書を作成できる	内容や体裁にかなり問題がある報告書を作成できる	報告書を作成できない	1	
	④-2発表資料作成	内容と体裁が優れた発表資料を作成できる	内容と体裁にはほぼ問題がない発表資料を作成できる	内容と体裁にやや問題がある発表資料を作成できる	内容や体裁にかなり問題がある発表資料を作成できる	発表資料を作成できない	0.25	
	④-3発表	内容と発表方法が優れた発表ができる	内容と発表方法にはほぼ問題がない発表ができる	内容と発表方法にやや問題がある発表ができる	内容と発表方法にかなり問題がある発表ができる	発表できない	0.25	
	④-4質疑応答	的確な質問や応答ができる	質問や応答ができる	質問や応答があまりできない	質問や応答がほとんどできない	質問や応答ができない	0.5	
⑤学生と担当教員、および学生相互におけるコミュニケーションをとれること	⑤-1学生・教員との会話	受講者や担当教員と円滑に会話できる。	受講者や担当教員とほぼ問題なく会話できる	受講者や担当教員とは必要最低限の会話はできる	受講者や担当教員に返答はできるが自ら話し出せない	受講者や担当教員とはとんど会話ができない	1	
	⑤-2グループワーク	グループの一員としてグループワークが円滑に進むよう努力できる	グループの一員としてグループワークに取り組める	グループワークに取り組めるが他人任せな姿勢が目立つ	グループワークに取り組んでいるがグループの一員としての意識に欠ける	グループワークに取り組むことができない	1	
⑥安全で健康的な学生生活を送ることができる	⑥授業の受講状況	毎回、授業へ気持ち向けて受講し、遅刻欠席等がない。	概ね、授業へ気持ち向けて受講し、遅刻欠席等がない。	たまに漫然と受講し、遅刻欠席等も多少ある。	漫然と授業を受講し、遅刻欠席等が目立つ。	怠学意欲が乏しく、遅刻欠席が多い。	1	
						合 計	11	

新しいルーブリックの工夫

- 達成目的を要素に分けて，その要素を評価対象とした。
- 評点を点数化し，要素ごとに重みを付けることで，傾斜配分とした。
- 前記したルーブリックは，要求する水準が高すぎるとの指摘があったため，評点3を，7割方の学生が到達できそうな基本の水準へと改めた。
- 学修ポートフォリオを解釈するツールというよりも，教員が学生のパフォーマンスを測る基準とした。

新しい基礎ゼミの授業計画例

回数	授業計画
1~5回	■学部教養（弘前大学における学生生活の基本ルールとコンピュータの利用方法は初回に説明するようにしてください。）
6~7回	■グループの作成（2~3人） ■ブレインストーミングの方法を説明 ■テーマを発表（必要に応じてテーマについて説明） ■ブレインストーミングを体験する（グループ規模の変更、グループメンバーの変更等を適宜行う。また、キーワードからの連想や既に出ているアイディアの変化を考えさせるなど、発想の視点を変えてみる。）
8回	■グループの作成（5~7人） ■KJ法の説明 ■KJ法を体験する①（簡単な練習問題でKJ法を体験してみる）
9~11回	■テーマを発表（必要に応じてテーマについて簡単に説明する） ■KJ法を体験する②（図書館やインターネット等で、テーマに関連する情報を調べ、KJ法を活用して整理する。その際、学生には以下の点などに留意することを伝える。） ・情報収集は、多角的に、定性的に、間接的なものまで集めること（1冊の図書で満足しない） ・情報収集を行う収集した資料を読む際には、高校の教科書等の読み方とは異なり、検証しながら読むこと
12~13回	■KJ法で整理した内容を発表資料にまとめる（学生には以下の点などに留意することを伝える。） ・発表資料はA4用紙1枚~3枚程度で簡潔にまとめること ・聞き手が納得しやすいストーリーを考えて、発表資料の全体の流れをつくること ・見出しやタイトルをつける等して、主張したいことが一目でわかるようにすること ・図解するなどして、それぞれの内容の関係がわかるようにすること ・結論（主張）に至った「根拠」（客観的データ等の事実、文献等）を示すこと ・文章は簡潔に、かつ、ポイント・フォント・色等を変えてメリハリをつけること ■発表練習を行う
14~15回	■グループ別の発表（必要に応じてクラスを2つに分けるなどして、「発表時間」と「発表に対する各グループでの検討時間」を確保する。） ■各グループは他の発表を聞いた上で、疑問点等について協議して質問する（論理的な思考力の育成につなげるため、批判力の芽を培う。） ■グループで自分たちの活動を振り返り、「できたこと」「できなかったこと」を話し合う。（「ルーブリック」の活用を想定。）

新しい基礎ゼミの到達目標の遵守

- 基礎ゼミのシラバス・到達目標は統一されていた。
- しかし，実際の教育内容はバラバラで，成績評価の方法や分布もバラバラであった。
- 新しい基礎ゼミでは，全ての学生が定められた到達目標に達成できるように，教育内容をより統一して，成績評価の方法と分布が，教員間で同一のものとなるように，「手引き書」を作成した。
- よって，全ての教員が統一ルーブリックを利用することを前提としている。

成績評価の課題と標準化

成績評価に関する課題

- 成績評価の結果を全科目通して眺めてみると，驚くほど結果にバラツキがあることが分かる。
- 弘前大学の例では，教養教育の科目群ですら，極端な成績（不可が8割を超える，または，秀が5割を超える）を付けているものがある。
- このことは，恐らくどの大学においても，共通の問題として認識されていると思う。

中央教育審議会答申の指摘

- 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年12月24日）は成績評価の現状と課題について，下記のように指摘している。
  - 我が国の大学は，成績評価について個々の教員の裁量に依存しており，組織的な取組が弱い。従来のままでは，大学全入時代の学生の変容に際し，学生確保という経営上の要請も相まって，なし崩し的に安易な成績評価が広がるおそれがある（26頁）。

具体的な改善方策

- 答申が提示する具体的な改善方策とは，
  - 教員間の共通理解の下で，成績評価基準を策定し，その明示について徹底する。
  - 成績評価の結果について，基準に準拠した適正な評価がなされているかの，組織的な事後チェックを実施する。
  - 成績評価の通用性を高める方策として，学内の教員以外の第三者の参画を求める仕組みを検討する（27頁）。

改善のスリー・ステップ

1. 成績評価基準の策定と明示
   - 絶対評価を基本的な理念としつつ，相対評価を組み合わせた独自の設定を，学科の全教員で共有することが必要。
2. 組織的な事後チェック
   - 同僚評価のボトムアップで点検する制度が必要。
3. 第三者の参画
   - 他大学の教員による互助の精神が必要。

ルーブリックの利便性

- ルーブリックの作成・利用は，
  - 成績評価基準を教員が共有するのに，便利である。
  - 同僚評価による事後チェックを行うのに，便利である。
  - 他大学の教員が教育内容の水準の妥当性を調べるのに，便利である。
- 外部評価を受審する際にも，ルーブリックは教育の水準を示す証拠となり得る。

まとめ

まとめ

- ルーブリックを作成するだけならば，一人でも完成できる，難しい作業ではない。
- しかし，そのルーブリックを適切に用いてもらうには，何らかの工夫が必要である。
  - 義務化？　利便性の提示？　手引き書の作成？
- また，ルーブリックの内容は，利用する教員・学生の意見を踏まえて，適宜修正する必要が生じるだろう。
- よって，修正のプロセスも，あらかじめ明示しておく必要があると思われる。

ご清聴ありがとうございました。

他大学ＦＤ研修等参加報告

他大学等における FD 研修等への参加

2014 年度、総合教育研究センター高等教育開発部門として参加した学外における FD 研修、各種セミナー、シンポジウム、学会等は以下の一覧に示す 12 件であった。

これらの研修等に参加して得られた知見の一部については、全学委員会の場や、福島大学共通教育委員会が発行する『共通教育アリーナ』を中心に共有してきた。近年の高等教育政策の趨勢に鑑みれば、教育の内部質保証、アクティブ・ラーニングや反転授業等に代表されるような従来の教育からの質的転換、国際化、ICT の活用等、福島大学全体として対応していかなければならない課題は多岐にわたる。そのため、より柔軟で広範囲を対象とした情報共有を一層推進していく必要があろう。

なお、今年度は、他大学等の研修への参加のみならず、各大学が取組む Institutional Research（IR：機関調査）や、ICT を活用した教育実践等についての訪問調査も精力的に実施した（IR：山形大学、鹿児島大学、金沢大学　ICT：創価大学、京都外国語大学、信州大学)。

1. 内田洋行　大学改革セミナー（2014 年 4 月 17 日）
   テーマ：主体的な学びに向けて、アクティブ・ラーニングの成果と課題
   会　場：株式会社内田洋行新川本社

2. 「大学教育再生加速プログラム」公募説明会（2014 年 4 月 24 日）
   テーマ：平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム」公募説明会
   会　場：文部科学省 東館３F

3. 大学教育学会第 36 回大会（2014 年 5 月 31 日 - 6 月 1 日）
   テーマ：研究と実践の往還から創出する知識
   会　場：名古屋大学 東山キャンパス

4. 日本高等教育学会第 17 回大会（2014 年 6 月 28 日 - 29 日）
   テーマ：日本高等教育学会第 17 回大会
   会　場：大阪大学 豊中キャンパス

5. 東洋大学 IR 室設立記念国際シンポジウム（2014 年 7 月 12 日）
   テーマ：大学の教育改革と IR の役割
   会　場：東洋大学 白山キャンパス

6. 東北大学高度教養教育・学生支援機構セミナー（2014 年 7 月 18 日）
テーマ：授業デザインとシラバス作成
会　場：東北大学 川内北キャンパス

7. 東北大学高度教養教育・学生支援機構セミナー（2014 年 9 月 1 日）
テーマ：アカデミック・ライティングを指導する
会　場：東北大学 川内北キャンパス

8. 第 64 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会（2014 年 8 月 28 日 - 29 日）
テーマ：大学の専門性を支える教養教育
会　場：帯広畜産大学

9. 東北大学 教育評価分析センター キックオフセミナー（2014 年 9 月 10 日）
テーマ：学修成果検証に基づく教育マネジメントの推進と課題
会　場：東北大学 片平キャンパス

10. 山梨大学 反転授業公開研究会（2014 年 9 月 24 日）
テーマ：反転授業がもたらす学生主体のアクティブな対面授業
会　場：山梨大学 甲府キャンパス

11. 平成 26 年度東北地域大学教育推進連絡会議（2014 年 10 月 18 日）
テーマ：学生の主体的な学修を促すラーニングコモンズの在り方
会　場：弘前大学

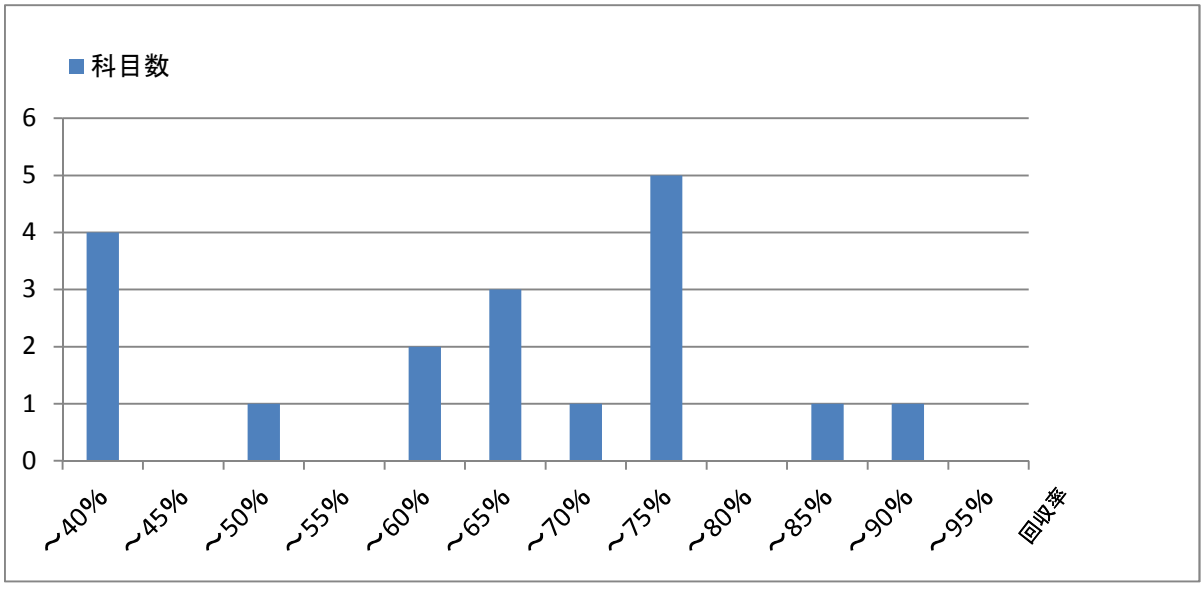
12. Q-Links Q-Conference2014（2014 年 12 月 6 日）
テーマ：同じやるなら～Why not join us?～
会　場：崇城大学 池田キャンパス

LiveCampus を利用した
中間アンケート実施結果

LiveCampus を利用した中間アンケート実施結果

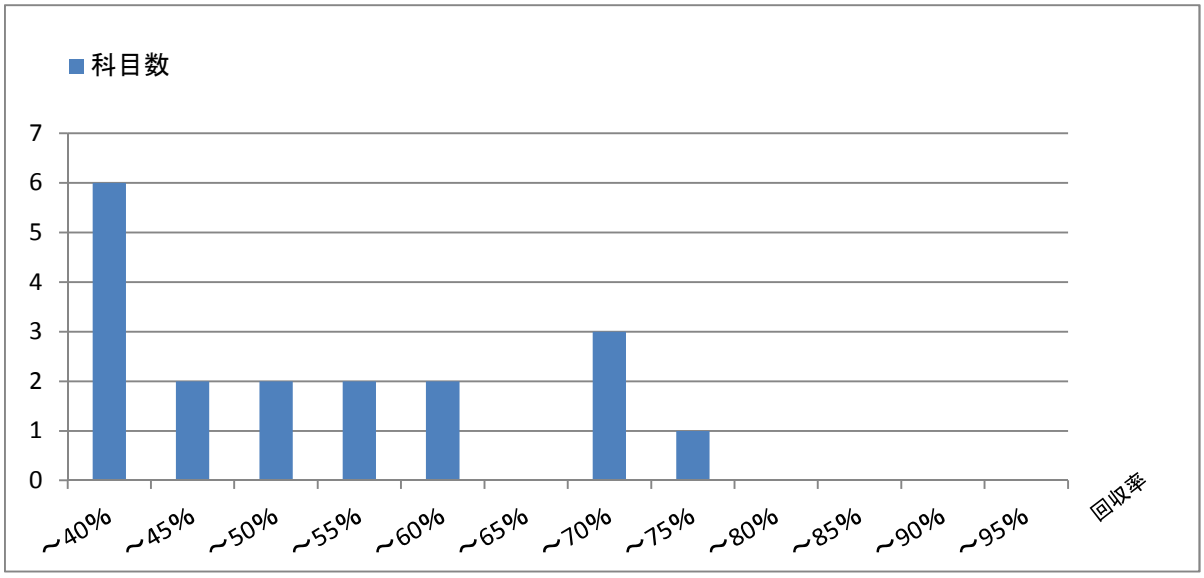
【前期中間アンケート】

1. **実施日時**：2014 年 5 月 7 日～2014 年 5 月 22 日
2. **実施科目数**：23 科目（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：18 科目）
3. **実施対象者数（履修登録者数）**：のべ 1,010 人
   （対象者が 10 人未満の科目を除く場合：984 人）
4. **提出者数**：のべ 629 人（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：612 人）
5. **平均回収率**：62.3%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：62.2%）
6. **最大値**：100.0%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：88.9%）
7. **最小値**：32.8%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：32.8%）
8. **回収率分布**（対象者が 10 人未満の科目を除く。）



【後期中間アンケート】

1. **実施日時**：2014 年 11 月 4 日～2014 年 11 月 20 日
2. **実施科目数**：19 科目（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：18 科目）
3. **実施対象者数（履修登録者数）**：のべ 1,303 人（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：1,296 人）
4. **提出者数**：のべ 711 人（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：709 人）
5. **平均回収率**：54.57%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：54.71%）
6. **最大値**：74.0%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：74.0%）
7. **最小値**：29.0%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：32.0%）
8. **回収率分布**（対象者が 10 人未満の科目を除く。）



（参考）期末（紙ベース）回答率

H26	前期 65.6%	後期 55.6%
H25	前期 67.0%	後期 58.4%
H24	前期 67.0%	後期 61.6%
H23	前期 62.5%	後期 61.4%
H22	前期 64.8%	後期 61.6%
H21	前期 67.9%	後期 60.9%

教育改善のための学生アンケート
集計結果

「教育改善のための学生アンケート」に関する平成 26 年度の活動

平成 26 年度は、「教育改善のための学生アンケート」の実施・集計の他、以下に挙げる活動を行った。

・平成 26 年度前期における「教育改善のための学生アンケート」の改訂提案

「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）の改訂については、昨年度より教育企画委員会を中心に議論を進めてきたところである。平成 26 年度前期は、これらの議論の成果を踏まえ、改善を図るべき主な課題を教育企画委員会にてまとめるとともに、全学類の教員会議に報告し、課題の共有を図った。これら主な課題のうち、質問内容に関わる改善策については、「自由記述欄の統合」「質問項目の精選」「科目別設問の欄の追加」を趣旨とする質問紙の改訂を、平成 26 年度前期中に実施した。質問紙改訂についての詳細は後掲の参考資料「「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）の改訂について」（2014 年 5 月 20 日、教育企画委員会提案資料）を参照されたい。

・平成 26 年度後期における「教育改善のための学生アンケート」の改訂提案

平成 26 年度後期は、前期に残された主な課題について教育企画委員会にて対応策を検討した。具体的な課題は、①授業アンケート実施回数の縮減、②アンケート結果を踏まえた改善結果の可視化、③アンケート活用方針の弾力化、④アンケートのＷＥＢ化、の４つであった。検討の結果、これらの課題のうち①②に関わる対応策として、授業アンケートの隔年実施と「フィードバック・レポート（仮称）」の導入を教育企画委員会に提案し、各学類からの了承を得て決定された。提案の詳細は後掲の参考資料「授業アンケートの隔年実施と改善結果の可視化に向けて」（2014 年 11 月 20 日、教育企画委員会提案資料）を参照されたい。また、提案に対する学内からの主な質問・意見に対しては、後掲の参考資料「授業アンケートの隔年実施と改善結果の可視化に関するＱ＆Ａ」（2015 年 2 月 18 日、教育企画委員会提案資料）に示す回答を行なった。

・「教育改善のための学生アンケート」経年比較資料（続報）の公表

その他、平成 26 年度には、『総合教育研究センター紀要』第 16 号に掲載の「「教育改善のための学生アンケート」平成 13-14 年度データの経年比較資料」の続報として、共通教育（共通領域、自己デザイン領域）の科目群別、専門教育の学類別の経年比較資料を作成した。経年比較の詳細は、『総合教育研究センター紀要』第 18 号に掲載されている。福島大学の教育活動をふり返り、更なる充実を図る上での基本データとして、これら２つの経年比較資料を併せて御参照いただきたい。

「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）の改訂について

各セメスター末に実施されている「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）について、以下の通り、質問紙の内容改訂を提案する。

１．改訂の経緯

「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）については、今年度の教育企画委員会の引継ぎ事項、及び年度計画において、改訂に向けた検討が課題とされている（資料１）。また外部評価及び監事監査の指摘事項や（資料２）、教職員及び学生アンケートの結果及びＦＤ合宿研修での検討結果にも（資料３）、授業アンケートの見直しを求める声が挙げられている。現行の授業アンケートが抱える主な課題は、以下の３点である。

１）授業アンケート全般について

・教員と学生の双方に最も多いのは、アンケートが多すぎることへの不満である。また、それに付随する課題として、回答がいい加減になっているとの指摘がある。

２）質問内容について

・教員からは項目の過不足が指摘されている。また学生からは、自由記述が多いことなどについての不満が寄せられている。

３）活用方法について

・教育改善への活用、及び改善結果の可視化を求める声が、教員と学生の双方から寄せられている。また学生及び職員からは授業アンケートのＷＥＢ化が提案されている。

２．改訂の方針

以上の課題のうち、授業アンケートが多すぎるとの不満、及び質問内容についての不満への対応として、平成２６年度前期の授業アンケートより、以下に示す内容の簡略化の方針のもとに、質問紙を改訂することを提案したい（資料４）。

①自由記述欄の統合

・従来、授業評価の項目別に設けられていた４つの自由記述欄を１つに統合する。

②質問項目の精選

・「授業時間外の学習」と「授業理解のための努力」の設問を一つに統合する。
（「授業理解のための努力」は“何もしなかった”の選択肢以外は、選択式の設問になじまない。）

③科目別設問の欄の追加

・項目の不足への対応として、授業ごとに質問を設定できる欄（自由記述式）を追加する。

３．その他の課題について

その他、授業アンケートの実施回数が多すぎる点、教育改善への活用、及び授業アンケートのＷＥＢ化については、これまでの授業アンケートの成果の分析（資料５）、及び他大学における動向の調査を含め（資料６）、引き続き検討を進めていく必要がある。

資料１．平成２６年度の課題（授業アンケートに関する項目抜粋）

・教育事項に係る主な次年度の検討課題について（平成２６年３月２６日　教育担当副学長）

３．授業評価アンケートについて

授業評価アンケートについては、十分に問題を深めることができず、全学に提起できていないが、教育企画委員会とその副委員長会議で若干の議論を行ってきた。

まずこのアンケートシステム自体による成果とは必ずしも言えないが、学生の評価自体は漸進的に高くなっている点は評価できる。 問題点として以下の点が挙げられる。①「個々の授業ごとの集計は授業担当者のみに返すこととし、FD プロジェクト(現在は教育企画委員会)をはじめ、如何なる組織でもそのデータを扱わない」とされていて、一定の「科目群」での「集計結果については全学の検討に付す」とされているが、他大学で行われているアンケートの活用に比して制約が大きく、利活用に難がある。②学生の学習履歴とこうしたアンケートを連動させて、個々の学生への教育効果を測ることが現時点での全国的動向となっているが、こうした点への踏み込みが現行では全く不可能となっている。③学生からすると、授業終了時点のアンケートで、そのアンケート結果が当セメスターの授業改善につながらず、タイミングもずれる。④学生のアンケート疲れがあって、不満もある。⑤費用面の問題も所在する。

したがって、今後利活用のあり方について、あらためて全学的な議論を行うことによって認識を深め、より効果的なアンケートに変えていかねばならない。その際第 1 に、全学的な一律方式ではなく、各学類でどのように自学類の教育改善に役立てるかを自律的に検討することを基本とする方向で考える必要があろう。「FD の分権化」である。

しかし、①アンケート項目は追加修正は可能だが、全学的な必須要件等は教育企画委員会から提示、②できるだけ迅速な対応が可能で、費用面でもメリットのある LiveCampus の利用を考慮、③頻度は必ずしも毎年全科目にはこだわらず、2 年間をかけて全科目をカバーする等を考慮、④自学類での FD 活動に資する、の４点には留意しておく必要がある。

・次年度の検討課題について（平成２６年３月２０日　教育企画委員会）

②授業評価アンケートの扱い等の検討

他大学におけるアンケート結果の活用状況を調査し、学内へ周知するとともに、改訂に向けた検討を進める。

・平成２６年度の年度計画

【中期計画 013】

・学生の授業評価を授業改善に活用するなど、学生参加型のＦＤを推進し、教員の授業力や教育力の向上を図る。

《平成２６年度の年度計画》

・「教育改善のための学生アンケート」の新たなシステムの構築に向けて、これまでの成果と課題についての分析と情報共有を図る。

資料２．外部評価及び監事監査における授業評価についての指摘抜粋

Ｈ１９外部評価

「授業評価で明らかになった個別教員のスコアについては、少なくとも学内で公開できるように運んで行かれるべきだと思う。多くの大学で学内公開するようになっているし、それで深刻な問題がおきたという話はほとんど聞かない。また、公開している大学の場合、授業に関する学生の個人意見やそれに対する教員の所見も、併行して公開している。以上のことに加えて、評価の対象を非常勤の教師に拡大している例もある（立教大学)。授業評価やＦＤに関する疑問で大きいのは、それが教育評価さらに頭越しの教員評定につながるのではないかという疑惑だが、それが払拭されていれば、公開にも抵抗はなくなるのではないか」

Ｈ２２監事監査

「特に授業評価は学生も含め、膨大な手間と予算をかけても全学的に有効に活用されていない。というより活用しないことにしている点が、外から見ると理解できない。２２年度に実施された授業評価アンケートの活用に関する教員の調査から、アンケート結果の活用に対する肯定的な回答が多くはないという実情を考えると、授業アンケートの継続を見直す必要があるのではなかろうか。ただ、活用しないという背景に、学生の授業評価の信頼性を疑うことや、教員評価に悪用されるという危惧があるとしたら、学生や大学を信用しないと言うことにもつながるので、アンケートの見直しだけの問題でないように思える。他方、これとは異なり、人間発達文化学類や行政政策学類などの一部授業に関しては学生も交えた共創的な授業改善がなされており、そうした方策を他の授業科目にも広げたり、他学類と共有する努力を行う方が、従来の機械的なアンケートよりはるかに実質的ではないかと考える。ただ授業アンケートは教員個人に返されることで、それを活用して授業を改善している教員もいることから考えると、授業アンケートを廃止するだけでなく、個人的に学生の授業評価を改善に取り組もうとする教員への支援は必要であろう。なお、２３年度には学生が直接コンピューター上で回答する方策が試行されることが計画されているので、その活用を生かすことが期待される。」

Ｈ２３監事監査

「「教育改善のための学生のアンケート」が実施されているが、アンケート結果を活用して個々の教員の教育力の底上げに結び付けて欲しい。」

Ｈ２４監事監査

「「教育改善のための学生のアンケート」が実施されているが、アンケート結果を活用して個々の教員の教育力の底上に結び付けると共にその成果を共有して教育組織の高度化を実現して欲しい。」

Ｈ２５外部評価（未定稿）

「学習成果の検証は、独自な調査だけではなく、日々の教育の内容改善、組織的な改善に結び付けていくためには、コストも視野に入れ、成績データと授業評価の活用を進めるべきである。」

資料３．授業アンケートに対する教員、学生、職員の声

※平成 25 年 7 月 17 日　第 79 回教育企画委員会資料より抜粋。

①教員側の不満等（板橋、2011、『総合教育研究センター紀要』10、p.9）

- 質問項目に正解がない
- 教育目的や学生の知識・レベルと教育内容の関連に関する質問がない
- 教員が回収するのはおかしい
- 自由記述の記載量の減少
- 改善結果が次年度になってしまう
- 履修撤回する学生の声を拾えない
- 設備に関する不備は別のアンケートにすべき
- 学生の出席率と評価との関係（出席率が悪い学生の評価をどう考えるか）
- 教員評価データを活用すべき
- 改革論議のために利用できるようにすべき
- 結果の公表
- 中間アンケートとの整合性
- 教員評価にリンクしないで何らかのチェック
- 回答・記述が丁寧でない（無責任な回答）
- アンケートが多い
- 全数調査の必要性は？　など

②学生側の不満等（2011 年度 FD 合宿）

- 学習時間に関する質問はなぜあるか（前半は自己反省）
- 3 つの自由記述部分が同じようになってしまう（自由記述は最後へ）
- 不要と思われる質問がある
- 細かな点（声の大きさ、配布資料の適切性、学生の理解度の把握など）を入れるべき
- 筆記の欄が多い（書く内容が重複する）
- 授業に対して発言できる点はない
- 専門、共通全部に必要か？
- 受講者数による差の改善（少人数や大人数による弊害）
- WEB 入力にしてほしい
- 配布、回収の方法の改善
- アンケート以外の方法
- 内容以外のスキル部分についての中間アンケートの実施
- 書く時間がない
- 人数が多い、大きい教室だと書かない
- アンケートが多すぎて疲れる
- 中間は紙、最後は WEB
- HP 公開の方法の妥当性
- 改善されたかどうか、分かりにくい
- 教員が初回の授業で、改善や工夫を伝えてほしい
- フィードバックは、自分自身のためにならない（やっている意味がわからない）
- 公開の方法を工夫してほしい
- 先生に特徴がないと書けない　など

③事務的な課題等

- 授業アンケートは紙媒体で実施しており、集計は業者に委託している。その際、集計には 160 万円の費用がかかっている（なお、データは最終的にエクセルファイルで納入され、教務課のデータ内に蓄積されている)。
- LC には授業アンケート機能が実装されている。当該機能を使用して、昨年度後期から中間アンケートは WEB 上での実施となっている。機能があるのに利用していない。

資料４．授業アンケート質問紙改訂方針

授業コード番号

教育改善のための学生アンケート

福島大学ＦＤプロジェクト

◆このアンケートは，本学の教育改善のため，学生のみなさんにご協力をいただいて実施するものです。
◆このアンケートの集計結果の取り扱いについては，次のとおりです。
①各科目の集計結果は，それぞれの授業担当教員にフィードバックされます。
②共通科目は各科目グループに分類し，科目グループ単位の集計結果を報告書において公表します。
③専門科目は学類ごとに集計し，その集計結果を報告書において公表します。
④報告書は福島大学ホームページにて公開しています。

Ⅰ．(1) 学籍番号の最初の５桁を記入してください
（統計処理上，所属と学年を把握するためです）。 (1)

Ⅱ．この授業についてのあなた自身の取り組みについておたずねします。
(2) この授業にどのくらい出席しましたか。
1. 毎回出席した　2. 2/3 以上出席した　3. 半分以上出席した　4. 出席は半分未満だった (2)

(3) 授業時間以外にこの授業に関して１回の講義あたり平均してどのくらい予習・復習，あるいは関連の学習をしましたか。
1. ３時間以上　2. 2〜3 時間未満　3. 1〜2 時間未満
4. 30 分〜1 時間未満　5. 30 分未満　6. ０分（何もしなかった）←追加 (3)

削除

(4) あなたはこの授業をよく理解するためにどのような努力をしましたか（三つまで回答）。1-6 のどれもしなかった人は７と一つだけ回答してください。
1. ノートや配付資料を復習した　2. インターネットで検索した　3. 参考書を買って調べた
4. 図書館等で文献を調べた　5. 友だちと話して理解するようにした
6. 先生に質問した　7. 何もしなかった (4)

【以下の各設問については，次の区分により評価をし，該当する評価ポイント５〜１のいずれかを記入してください。】
５：はい，４：かなりそうだと言える，３：どちらとも言えない，２：あまりそうとは言えない，１：いいえ

Ⅲ．この授業及び担当教員に関して，次の(5)〜(7)の項目について評価ポイント５〜１のいずれかの数字で答え，その理由をお書きください。
(5) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか（観点：授業の準備，授業への熱意，学生への対応等）。
(5)　(5 択式)　(理由)

(6) 教育の方法は適切でしたか（観点：質問への対応，発表・討論の機会，シラバスの記述内容等）。
(6)　(5 択式)　(理由)

(7) 授業の内容は適切でしたか（観点：魅力あるトピック，教材・教科書の適切性，参考文献の提示，授業の進度，シラバスに記述された目標の達成度等）。
(7)　(5 択式)　(理由)

自由記述欄は最後の一つに統合

Ⅳ．総合的にみてこの授業に満足しましたか。評価ポイント５〜１のいずれかの数字でお答えください。
(8) その他，この授業に関する感想・要望・意見，教育環境の改善点等を書いてください。

総合評価 (5 択式)　(8)

※最後の自由記述の設問の変更
→「あなたが、この授業を通じて学んだことで、特に印象に残っているのはどのようなことですか。
授業への感想や意見も含め、自由にご記入ください。」
※その他、授業ごとに設定できる欄の追加を検討する。

授業コード番号

教育改善のための学生アンケート

福島大学教育企画委員会

◆このアンケートは、本学の教育改善のため、学生のみなさんにご協力をいただいて実施するものです。
◆このアンケートの集計結果の取り扱いについては、次のとおりです。
①各科目の集計結果は、それぞれの授業担当教員にフィードバックされます。
②共通科目は各科目グループに分類し、科目グループ単位の集計結果を報告書において公表します。
③専門科目は学類ごとに集計し、その集計結果を報告書において公表します。
④報告書は福島大学ホームページにて公開しています。

Ⅰ．（１）学籍番号の最初の５桁を記入してください。
（統計処理上、所属と学年を把握するためです） （１）

Ⅱ．この授業についてのあなた自身の取り組みについておたずねします。
（２）この授業にどのくらい出席しましたか。
１．毎回出席した　２．2/3 以上出席した　３．半分以上出席した　４．出席は半分未満だった （２）

（３）授業時間以外にこの授業に関して１回の講義あたり平均してどのくらい予習・復習、あるいは関連の学習をしましたか。
１．３時間以上　２．２～３時間未満　３．１～２時間未満
４．３０分～１時間未満　５．３０分未満　６．０分（何もしなかった） （３）

【以下の各設問については、次の区分により評価をし、該当する評価ポイント５～１のいずれかを記入してください。】
５：はい　４：かなりそうだと言える　３：どちらとも言えない　２：あまりそうとは言えない　１：いいえ

Ⅲ．この授業及び担当教員に関して次の（４）～（７）の項目について評価ポイント５～１のいずれかの数字で答えてください。

（４）教員の授業に対する姿勢はよかったですか。
（観点：授業の準備、授業への熱意、学生への対応等） （５）

（５）教育の方法は適切でしたか。
（観点：質問への対応、発表・討論の機会、シラバスの記述内容等） （６）

（６）授業の内容は適切でしたか。
（観点：魅力あるトピック、教材・教科書の適切性、参考文献の提示、
授業の進度、シラバスに記述された目標の達成度等） （７）

（７）総合的にみてこの授業に満足しましたか。 （８）

Ⅳ．あなたが、この授業を通じて学んだことで、特に印象にのこっているのはどのようなことですか。
授業への感想や意見も含め、自由にご記入ください。

Ⅴ．その他、授業担当者からの質問があった場合には、以下の欄に回答をご記入ください。

資料５．「教育改善のための学生アンケート」回答における「総合満足度」の上昇傾向

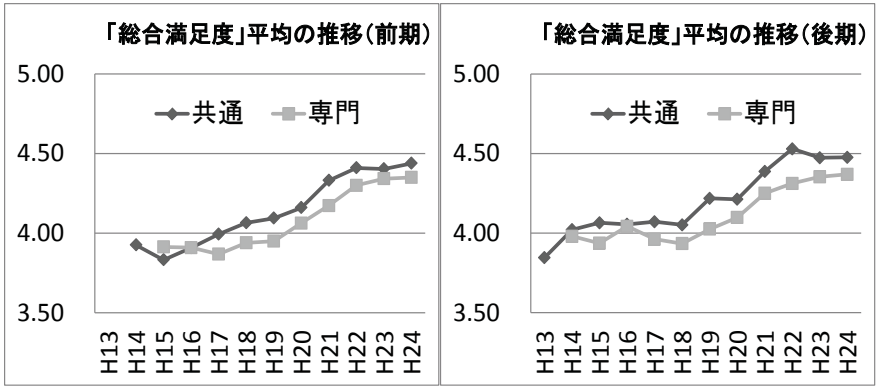
・本資料は、福島大学において平成 13 年度より実施されてきた「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）について、公表されているデータをもとに経年比較を行い、その結果をまとめたものである。具体的には、各年度の『福島大学 FD プロジェクト活動報告書』に掲載された共通教育（共通領域・自己デザイン領域）と専門教育の別の集計をもとに、各設問の回答数、割合、及び平均ポイント等をまとめ、前期、後期それぞれの経年による推移を一覧表ないしグラフにて示している。…

・今回の経年比較から得られる示唆として特筆すべき点は、“勉強しない学生”の減少傾向と、授業・教員・教育環境に対する評価ポイントの上昇傾向である。

・たとえば“勉強しない学生”の減少傾向は「授業理解の努力」や「時間外の勉強」に対する回答傾向の変化にみてとることができる。「授業理解の努力」（本資料 6 頁参照）は、平成 18 年度後期以降に追加された設問である。授業を理解するために行った努力について、7 つ選択肢から 3 つまでを選ぶ回答形式であるが、このうち「何もしなかった」を選択する学生の割合が、継続的に減少している。また「時間外の勉強」（本資料 8 頁参照）では、平成 18 年度前期までは「非常によく勉強した」から「まったくしなかった」までの 5 段階で、平成 18 年度後期以降は 1 回の講義あたりの平均関連学習時間（5 段階）で、それぞれ授業時間以外の勉強量を尋ねている。このうち平成 18 年度前期までの経年比較からは「まったくしなかった」と答える学生の割合の減少を、平成 18 年度後期以降の経年比較では「30 分未満」と答える学生の割合の減少を、それぞれみてとることができる。

・また授業・教員・教育環境に対する評価ポイントの上昇傾向は「総合的な満足度」に対する評価ポイントの推移に顕著である。「総合的な満足度」（本資料 25 頁参照）は、平成 13 年度のアンケート開始時から現行の質問票に至るまで、一貫して 5 段階評価による回答形式となっている（「学年」を除くと、アンケート開始時の回答形式を保つ設問は「総合的な満足度」に限られる）。この「総合的な満足度」について、評価ポイントの平均ポイントをみると、共通教育では前期が 3.92 から 4.44 に、後期が 3.84 から 4.48 に上昇している。また専門教育でも前期が 3.91 から 4.35 に、後期が 3.98 から 4.37 に上昇している。

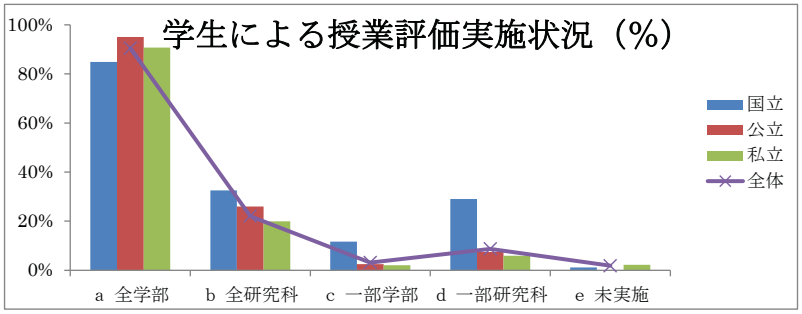
※「「教育改善のための学生アンケート」平成 13-24 年度データの経年比較資料」
（丸山、2014、『総合教育研究センター紀要』16）より抜粋



資料６．平成２３年度　文部科学省調査「大学における教育内容等の改革状況等について」

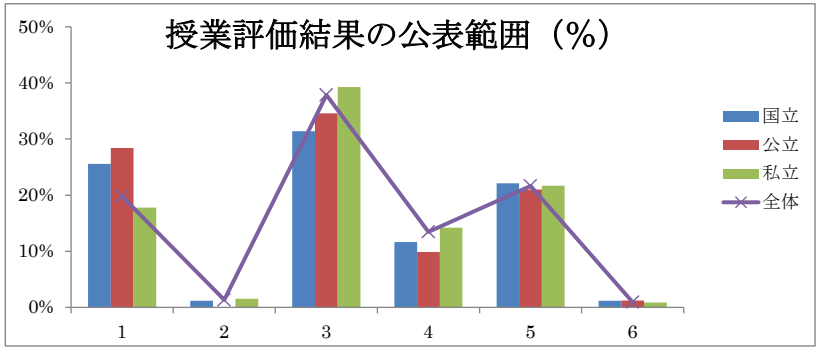
◆学生による授業評価の実施状況（※福島大学は○をつけたものに該当）

	実数				%			
	国立	公立	私立	全体	国立	公立	私立	全体
a 全学部	○ 73	77	536	686	85%	95%	91%	91%
b 全研究科	28	21	118	167	33%	26%	20%	22%
c 一部学部	10	2	12	24	12%	2%	2%	3%
d 一部研究科	○ 25	6	35	66	29%	7%	6%	9%
e 未実施	1	0	13	14	1%	0%	2%	2%



◆授業評価結果の公表範囲（※福島大学は○をつけたものに該当）

	実数				%			
	国立	公立	私立	全体	国立	公立	私立	全体
1 学内外（個人＋集計）	22	23	105	150	26%	28%	18%	20%
2 学内外（個人評価）	1	0	9	10	1%	0%	2%	1%
3 学内教員・学生のみ	27	28	232	287	31%	35%	39%	38%
4 学内教員のみ	10	8	84	102	12%	10%	14%	13%
5 教員本人のみ	○ 19	17	128	164	22%	21%	22%	22%
6 公表していない	1	1	5	7	1%	1%	1%	1%



授業アンケートの隔年実施と改善結果の可視化に向けて

１．授業アンケートに関わる平成 26 年度の課題

「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）の改訂については、昨年度より教育企画委員会を中心に議論を進めてきたところである。平成 26 年度前期は、これらの議論の成果を踏まえ、改善を図るべき主な課題を教育企画委員会にてまとめるとともに、全学類の教員会議に報告し、課題の共有を図った。これら主な課題のうち、質問内容に関わる改善策については、「自由記述欄の統合」「質問項目の精選」「科目別設問の欄の追加」を趣旨とする質問紙の改訂を、平成 26 年度前期中に実施している。

平成 26 年度後期は、残された主な課題について教育企画委員会にて対応策を検討することが求められる。具体的な課題は、①授業アンケート実施回数の縮減、②アンケート結果を踏まえた改善結果の可視化、③アンケート活用方針の弾力化、④アンケートのＷＥＢ化、の４つである。本資料では、これらの課題のうち①②に関わる対応策の叩き台として、授業アンケートの隔年実施と「フィードバック・レポート（仮称）」の導入を提案する。

２．提案の背景

福島大学における「教育改善のための学生アンケート」（授業アンケート）は平成 13 年度に開始されて以来、毎年度 2 回、各セメスター末に実施されてきた。全学で共通の質問紙が用いられており、また全ての科目がアンケートの対象となる。授業アンケートの目的は、第 1 に教員個人の授業改善、第 2 に学生のふり返りで、これは平成 13 年度以来、変わっていない。アンケート結果の活用は、以下の 3 つの方針にしたがって行われており、これも平成 13 年度から変化がない。

・福島大学における授業アンケート活用方針

①アンケートの本来の趣旨以外の目的で使われることを避けるため、個々の授業ごとの集計は授業担当者のみに返すこととし（データ入力と集計はすべて外注）、FD プロジェクトをはじめ、いかなる組織でもそのデータを扱わない。

②大学として教育改善に取り組むためには何らかのデータ分析は不可欠である。そこで、別表に示した科目群で集計をし、その結果については全学の検討に付す。その際、クラスサイズが一桁以内の授業は集計から除外する。また、授業科目が特定できるケースについては公表からはずす。

③自由記述内容については、個々の授業担当者が参考にすべきものであり、公表はしない。

（『平成 13 年度福島大学 FD プロジェクト活動報告書』77-78 頁）

以上の方針の下、福島大学における授業アンケートの結果については、各授業担当者への返却を基本としつつも、共通教育（共通領域・自己デザイン領域）の科目群別集計、及び専門教育の学類別集計が、各年度の『福島大学FDプロジェクト活動報告書』に掲載されてきた。これら公表済みの集計結果をもとにした経年比較の結果からは、授業の「総合的な満足度」評価ポイントの継続的な上昇等、大学としてポジティブな成果を見て取ることができる（資料１）。このように、大学全体における教育改善の成果をデータとして示す上でも、全ての科目を同時期に同一設問を用いて調査する現行の授業アンケートシステムの長所は、今後も継続していくべきと考えられる。

他方、福島大学における授業アンケートは、開始から 10 年余りを数えた現在、マンネリ化やフィードバックの不足に対する課題も抱えている。教職員及び学生アンケートの結果、ＦＤ合宿研修での検討結果からは、教員と学生の双方から、アンケートが多すぎる事への不満が寄せられており、現行のアンケート実施回数が少なからぬ労力を伴うものであることが伺える。同時に、授業アンケートの教育改善への活用や、改善結果の可視化を求める声が、教員と学生、さらには外部評価や監事監査の場において挙げられている（資料２及び資料３）。なお、授業評価結果のフィードバック対象を教員本人のみとする方式は、他大学と比較しても少数派に属する。平成 23 年度の文部科学省調査「大学における教育内容等の改革状況等について」では、授業評価結果の公表範囲について、教員本人のみとする大学は全体で 22%、国立大学に限っても 22%であった（資料４）。

学生による授業アンケートの結果は、あくまで当該授業に対する主観的な「感想」であり、それを教員に対する個人能力評価と直ちに同一視することは誤りである（井下理 2010「『学生による授業評価』調査の活用を考える」89 頁、東北大学高等教育センター編『学生による授業評価の現在』東北大学出版会）。満足度の数値等が独り歩きする可能性を踏まえると、個別科目の集計結果を一律に公表すべきか否かについては、慎重に判断するべきであろう。しかし、大学内外における授業アンケートのフィードバックに対する要求の高まりを踏まえると、教員や大学が授業アンケートに寄せられた学生の声を真摯に受け止めていることを、何らかの方法にて学生側に伝えていくための組織的な工夫が必要であると考えられる。

３．授業アンケートの隔年実施と「フィードバック・レポート（仮称）」の導入について

以上のような授業アンケートの実施回数とフィードバックの方法については、昨年度より、教育企画委員会副委員長会議の場において、同様の課題に対する他大学の取組等も参照しながら、対応策の議論を進めてきたところである。議論のなかでは、１）授業アンケートのマンネリ化による教員の改善意欲の低下や学生回答の質の低下については国内外を問わず他大学においても同様の課題を抱えていること、２）このような課題への対応策として授業アンケートを隔年実施へと移行する事例が出てきていること、３）また授業改善の可視化については教員側にアンケート結果を踏まえたコメントを求めるとともに、それらのコメントを集積した事例集を作成して、教育改善手法の共有に活用する取組が他大学において進められていること、などが明らかとされてきた（資料５）。また、実際に福島大学において、授業アンケートを実質的な授業改善に活かしていくうえでも、毎セメスターに全ての科目について授業アンケートを行うのではなく、評価・分析を集中的に実施する年度と、その結果を踏まえて改善策を企画し、実際の授業に生かす年度を分ける事が現実的である、との意見が出されている。このような教育企画委員会副委員長会議における授業アンケートに関わる議論を踏まえた上で、以下の通り、授業アンケートの隔年実施と「フィードバック・レポート（仮称）」の導入を提案したい。

①授業アンケートの隔年実施について

総じて、学生からの授業アンケートに対する不満は、多くのアンケートに答えているにもかかわらず改善につながっているのかが見えない、ことによるところが大きいと考えられる。このような不満に対しては、第一に学生アンケート全体の整理や軽減によって対応する必要がある。他方、同時期に全科目に対して同一設問で行う現行システムの長所は、今後も活かしていく必要がある。これらを踏まえた上での提案として、同時期に全科目に対して同一設問で行う全学的な授業アンケートについては隔年実施（前期・後期の各セメスター末に全学的な授業アンケートを実施する年度と、前年度のアンケート結果を踏まえた授業改善に取り組むことを前提として全学的な授業アンケートは実施しない年度を交互に繰り返す）とするシステムが考えられる。この際、隔年開講科目、及び授業担当者が毎年度入れ替わる科目等、隔年実施では拾い上げることのできない科目については、Live CampusのWEBアンケート機能を活用する等の方法にて、全学的な授業アンケートを実施しない年度についても個別に対応するものとする。

隔年実施の導入は平成 28 年度以降が想定される。すなわち、全学的な授業アンケートについて、平成 27 年度は従来通りに実施するが、平成 28 年度は未実施とし、以降、同様のサイクルを繰り返す。なお本提案は、全学的な授業アンケートを実施しない年度について、個別の授業や学類・専攻の企画において必要な授業アンケートを実施することを妨げるものではない。また、授業時間を利用して行われる他の全学アンケート（共通教育アンケート等）についても、授業アンケートを実施しない年度に集中して実施する等の対策を併せて採ることで、学生のアンケート回答に対する負担を分散させることが期待できる。

②「フィードバック・レポート（仮称）」の導入について

他方、授業アンケートを隔年実施とするのみでは、授業アンケートのフィードバックに対する大学内外からの要求の高まりに応えたことにはならない。教員や大学が授業アンケートの結果を真摯に受け止めていることを可視化するための仕組みが必要である。このような課題に対する対応策として、授業アンケートに対する授業者側の対応をまとめた「フィードバック・レポート（仮称）」を新たに導入することを提案したい。具体的には、前年度に実施した授業アンケートの結果から授業者側が抜粋した内容（選択式設問の集計結果、自由回答のいずれでも可）と、それに対する授業者側のコメントや授業実践における工夫を掲載したものが、「フィードバック・レポート（仮称）」の内容となる。この「フィードバック・レポート（仮称）」の作成に当たり、授業アンケートを実施しない年度内に、授業を受け持つ全ての教員に対して、教員自らが選択した最低１科目の担当科目を対象に、次頁に示すフォーマットに基づいた授業実践紹介の提出を義務とする。

このような授業実践紹介を集積し、学内構成員の間で共有することが、「フィードバック・レポート（仮称）」導入の目的である。具体的な共有の方法としては、冊子体として全教員に配布するとともに、図書館への配架、及び学内からのみアクセス可能なシステムへのアップロードを通じて学生からも閲覧可能とする。また、「フィードバック・レポート（仮称）」に蓄積された改善手法については、課題別の分類・分析に基づいた授業改善 TIPS の作成や、授業改善に関する会議や懇談会での対話の材料とする等、各種の FD 活動の場における２次利用も想定される。先述の通り、福島大学全体としての授業満足度は向上傾向にあるが、これらポジティブな成果をもたらす個別授業の工夫や改善を掘り起し、共有していくための基礎的な資料としても、「フィードバック・レポート（仮称）」が果たす役割は大きいと期待できる。

「フィードバック・レポート（仮称）」の導入は、授業アンケートの隔年実施とあわせ、平成 28 年度以降が想定される。すなわち、前年度の授業アンケートの結果を踏まえた授業実践紹介について、平成 28 年度前期中の提出を各教員に依頼するとともに、提出された授業実践紹介に基づいた「フィードバック・レポート（仮称）」を平成 28 年度後期中に作成し、学内での共有を図る。なお、授業実践紹介の提出依頼と、「フィードバック・レポート（仮称）」の作成は、教育企画委員会において行うことが想定される。

・授業実践紹介のフォーマット（案）

教員氏名：	所属：
科目名：	
授業のねらいや、実践にあたっての知恵や工夫	
受講学生の声（授業アンケートの結果から）	
学生の授業アンケートの結果について思うこと（アンケート結果を踏まえた改善策等）	

※文量は制限しない。また授業のねらい・知恵・工夫については、他の執筆済資料からの転載も可とする。

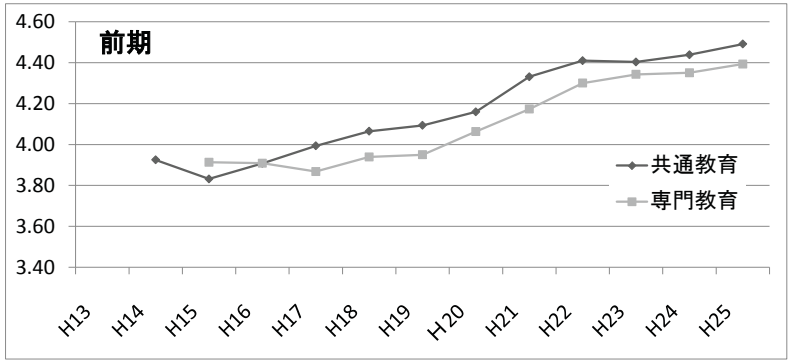
４．その他の検討課題－授業アンケート活用方針の分権化とＷＥＢ実施の検討

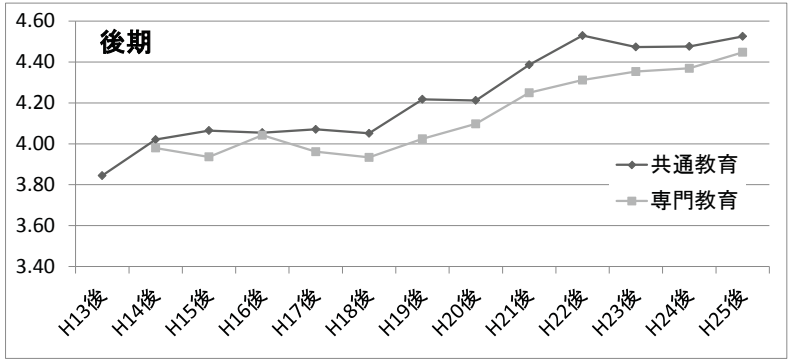
その他、授業アンケートについては、各学類や専攻が必要に応じて詳細な授業アンケートの分析をできるように、授業アンケートの活用方針を分権化・弾力化することや、成績データ等の学修履歴と授業アンケートを結び付けて分析するための記名式授業アンケートの導入、及び記名式授業アンケートとも関連するアンケートの WEB 化が、昨年度来の課題として残されている。これらの課題については、更なる授業アンケートの成果の分析、及び他大学における動向の調査を進めたうえで、改めて対応策を提案したい。

資料１．授業アンケートにおける「総合満足度」の平均評価ポイントの推移

・授業の総合的な満足度を 5 段階で評価する設問で、平均評価ポイントの経年比較を行ったものが以下の図表である。同設問は、平成 13 年度以降、一貫して調査票に含まれてきた。共通教育全体、専門教育全体では、平均ポイントが次第に上昇する傾向にある。また共通教育の平均ポイントが、専門教育の平均値をわずかながら上回る傾向にある。

前期	H13前	H14前	H15前	H16前	H17前	H18前	H19前	H20前	H21前	H22前	H23前	H24前	H25前
共通教育		3.92	3.83	3.91	3.99	4.06	4.09	4.16	4.33	4.41	4.40	4.44	4.49
専門教育			3.91	3.91	3.87	3.94	3.95	4.06	4.17	4.30	4.34	4.35	4.39
後期	H13後	H14後	H15後	H16後	H17後	H18後	H19後	H20後	H21後	H22後	H23後	H24後	H25後
共通教育	3.84	4.02	4.06	4.05	4.07	4.05	4.22	4.21	4.39	4.53	4.47	4.48	4.53
専門教育		3.98	3.94	4.04	3.96	3.93	4.02	4.10	4.25	4.31	4.35	4.37	4.45





資料２．アンケート実施回数と改善結果の可視化に関わる教員・学生の声

①教員側からの現行アンケートに対する意見・感想

・以下、板橋孝幸 2011「「授業アンケート」に関する教員の意識調査」『福島大学総合教育研究センター紀要』第 10 号より、アンケートの負担改善と改善結果の可視化に関わる教員側の意見を抜粋。同論考では 2010 年 1 月実施の教員対象アンケート「「教育改善のための学生アンケート」に関するおたずね」の結果が紹介されている。

・アンケートが多すぎる
・全数調査しなくてもよい
・毎年やる必要はない
・改革論議のために利用できるようにすべき
・結果の公表
・教員向け調査を頻繁にやるべき
・教員が記入者に説明もしくは反論する機会を保障すべき　など

②学生側からの現行アンケートに対する意見・感想

・以下、2011 年度のＦＤ宿泊研修で出された学生からの授業アンケートに対する意見の中から、アンケートの負担改善と改善結果の可視化に関わる教員側の意見を抜粋。なお、2011 年度のＦＤ宿泊研修は「福島大学はどう変わるべきか？」を全体テーマとして実施された企画である。

・アンケートが多すぎて疲れる
・改善されたかどうか、分かりにくい
・教員が初回の授業で、改善や工夫を伝えてほしい
・フィードバックは、自分自身のためにならない（やっている意味がわからない）
・公開の方法を工夫してほしい　など

・以下、平成 25 年度の共通教育アンケート（2 年次学生対象）の自由記述意見より、アンケート負担改善と改善結果の可視化に関わる教員側の意見を抜粋。なお、同様の意見は、平成 24 年度の共通教育アンケートの自由記述にも見られる。

・アンケートが多すぎる
・アンケートの結果反映させるべき
・アンケート結果は、もう少し重く受け止めるべきだと思う
・授業アンケートの評価を受けての授業改善を徹底させるべき
・授業評価アンケートが反映されている気がしない　など

※この他、平成 25 年度の共通教育アンケートの自由記述には、アンケートを未実施の科目がある、テスト時にアンケートを行う科目があるとの苦情が寄せられた。今回の提案とは別に、授業アンケートの趣旨を改めて確認し、理解を広めることが必要である。また、受講期間中に学生の声が反映されるよう、中間アンケートの実施を求める声も複数あった。現在も実施している WEB での中間アンケート（教員側が希望する科目で実施）について、利用拡大を呼びかける等の対応が考えられる。その他、個別の授業において、過去の授業アンケート結果の紹介するよう促すことも、今回の提案とは別に進めるべき対応であろう。

資料３．外部評価及び監事監査における授業評価についての指摘抜粋

平成１９年度　外部評価

「授業評価で明らかになった個別教員のスコアについては、少なくとも学内で公開できるように運んで行かれるべきだと思う。多くの大学で学内公開するようになっているし、それで深刻な問題がおきたという話はほとんど聞かない。また、公開している大学の場合、授業に関する学生の個人意見やそれに対する教員の所見も、併行して公開している。以上のことに加えて、評価の対象を非常勤の教師に拡大している例もある（立教大学）。授業評価やＦＤに関する疑問で大きいのは、それが教育評価さらに頭越しの教員評定につながるのではないかという疑惑だが、それが払拭されていれば、公開にも抵抗はなくなるのではないか」

Ｈ２２年度　監事監査

「特に授業評価は学生も含め、膨大な手間と予算をかけても全学的に有効に活用されていない。というより活用しないことにしている点が、外から見ると理解できない。２２年度に実施された授業評価アンケートの活用に関する教員の調査から、アンケート結果の活用に対する肯定的な回答が多くはないという実情を考えると、授業アンケートの継続を見直す必要があるのではなかろうか。ただ、活用しないという背景に、学生の授業評価の信頼性を疑うことや、教員評価に悪用されるという危惧があるとしたら、学生や大学を信用しないと言うことにもつながるので、アンケートの見直しだけの問題でないように思える。他方、これとは異なり、人間発達文化学類や行政政策学類などの一部授業に関しては学生も交えた共創的な授業改善がなされており、そうした方策を他の授業科目にも広げたり、他学類と共有する努力を行う方が、従来の機械的なアンケートよりはるかに実質的ではないかと考える。ただ授業アンケートは教員個人に返されることで、それを活用して授業を改善している教員もいることから考えると、授業アンケートを廃止するだけでなく、個人的に学生の授業評価を改善に取り組もうとする教員への支援は必要であろう。なお、２３年度には学生が直接コンピューター上で回答する方策が試行されることが計画されているので、その活用を生かすことが期待される。」

Ｈ２３年度　監事監査

「「教育改善のための学生のアンケート」が実施されているが、アンケート結果を活用して個々の教員の教育力の底上げに結び付けて欲しい。」

Ｈ２４年度　監事監査

「「教育改善のための学生のアンケート」が実施されているが、アンケート結果を活用して個々の教員の教育力の底上に結び付けると共にその成果を共有して教育組織の高度化を実現して欲しい。」

Ｈ２５年度　外部評価

「学習成果の検証は、独自な調査だけではなく、日々の教育の内容改善、組織的な改善に結び付けていくためには、コストも視野に入れ、成績データと授業評価の活用を進めるべきである。」

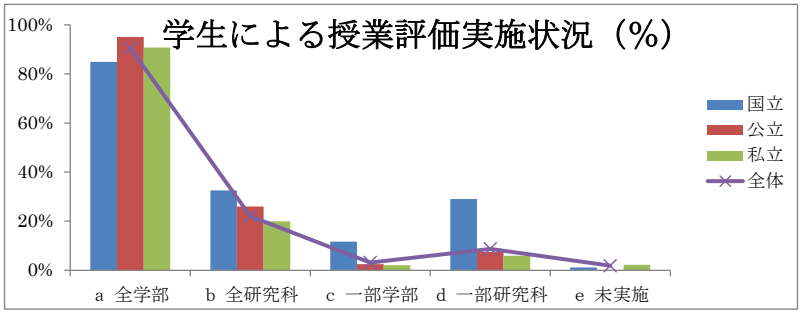
Ｈ２６年度　監事監査

「本学では FD のための授業アンケート結果は、授業アンケート開始時からの方針により、教員個人のみに還元される仕組みであり、データが存在するにも関わらず、科目群や学類毎にとりまとめた結果しか利用できないため、組織的な検討がなされているのか、また個々の授業に限っても改善策の実施や改善後の学生の反応の把握がなされているのか不明確である等、教育の質を高める PDCA サイクルが十分機能しているとは感じられない。授業アンケートを教育の質の向上につなげるためには、個々の授業科目に対する学生の評価結果を組織的に共有するシステムの構築が期待される。」

資料４．平成２３年度　文部科学省調査「大学における教育内容等の改革状況等について」

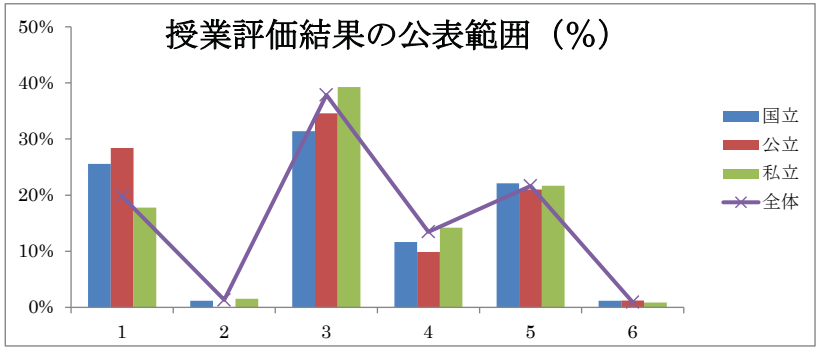
◆学生による授業評価の実施状況（※福島大学は○をつけたものに該当）

	実数				%			
	国立	公立	私立	全体	国立	公立	私立	全体
a 全学部	○ 73	77	536	686	85%	95%	91%	91%
b 全研究科	28	21	118	167	33%	26%	20%	22%
c 一部学部	10	2	12	24	12%	2%	2%	3%
d 一部研究科	○ 25	6	35	66	29%	7%	6%	9%
e 未実施	1	0	13	14	1%	0%	2%	2%



◆授業評価結果の公表範囲（※福島大学は○をつけたものに該当）

	実数				%			
	国立	公立	私立	全体	国立	公立	私立	全体
1 学内外（個人＋集計）	22	23	105	150	26%	28%	18%	20%
2 学内外（個人評価）	1	0	9	10	1%	0%	2%	1%
3 学内教員・学生のみ	27	28	232	287	31%	35%	39%	38%
4 学内教員のみ	10	8	84	102	12%	10%	14%	13%
5 教員本人のみ	○ 19	17	128	164	22%	21%	22%	22%
6 公表していない	1	1	5	7	1%	1%	1%	1%



資料５．アンケート実施回数と改善結果の可視化に関わる他大学の取組

①授業アンケート実施回数の見直しについて

・以下、「平成 25 年度ファカルティ・ディベロッパー養成講座／ＳＤコーディネーター養成講座」（平成 25 年 10 月 4-6 日、キャンパスプラザ京都）において、大阪大学教育学習支援センターの佐藤浩章氏による研修資料「授業アンケートの見直しと活用方法」より、授業アンケート実施回数の見直しに関わる指摘を抜粋。

従来のアンケートの問題点

・教員…毎回実施する時間的余裕はなく、改善のモチベーションが下がる。
・学生…中身が薄くなる。意味のあるコメントが少なくなる。
　　機械的に行うようになる。

スイス・ローザンヌ大学における新しいアンケートの実施方法

・全ての授業ではなく、2 年に 1 度最低 1 科目は実施する。全ての授業で行い、その対応をすることは不可能。自分で重点を考えて改善しようと思うものを教員に選んでもらう。

・情報は担当教員とＦＤ担当者との機密事項。学部長等には見せない。

・全ての人（組織・学長・教員）からの理解が必要。そのために、広報活動をしっかり行っている。ポスターを全ての教室に掲示（なぜ、どのように、具体的手段、記述方法、教員の授業改善に意味あるコメントしましょう）

・学生に 5～10 分の時間をかけて実施してもらう。

・結果について、教員は学生に必ずフィードバックする。

・なお、次頁に示す北海道文教大学による全国調査の結果において、アンケート実施回数を「２年に１回」と回答した大学は 2.1%と少数である。ただし、「その他」20.0%の中には、岩手大学（平成 22 年度から 2 年に 1 回に縮減）、福井大学（共通教育は 3 年に 1 回）、熊本大学（全学の最低実施基準としては 3 年間に 1 回）、石巻専修大学（3 年に 1 回）といった事例も含まれている。

②授業フィードバック

・以下、永原和夫他 2011「学生による授業評価に関する全国調査」『北海道文教大学論集』第 12 号より、アンケートの活用状況として、アンケート結果を踏まえた教員コメントの集約を実施している大学の事例を抜粋。なお同調査は、全国の 135 大学（すべての国立大学含む）を対象に実施されたもので、回収率は 70.4%であった。

大学名	アンケートの活用状況
東北大学	各授業担当教員が自ら授業評価集計結果等を受けて「授業実践記録」を作成することにより、授業改善を行っている。また、その「授業実践記録」は科目群ごとに設置された委員会が確認し、組織としての授業改善に役立てている
福井大学	結果は各教員へ通知する。各教員へアンケートの結果を送付し、教員にフィードバックに係るアンケート及びリフレクションペーパー（授業改善プラン）を提出してもらう（医学部）。集計結果は冊子体にして教員（文京キャンパス全教員）に配布し、また、各部会（共通教育を円滑に実施するために本学共通教育センターに設置）等において結果をフィードバックさせている。
静岡大学	教員にアンケート結果についての報告書を作成・提出してもらい、学生や教員向けに学内限定で Web 掲載している。報告書の提出率は 5 割を超えている。
愛知教育大学	科目担当者名を付さずに、全ての集計結果を Web に公開している。また、集計結果は、自由記述の内容と共に、担当教員へフィードバックし、各教員における改善活動に資している。また、集計結果を基に教員による自己評価書の作成を実施し、意識向上に努めている。
滋賀医科大学	授業評価結果を教員にフィードバックしている。教員はそれに対して反論・改善策を利バックしている。評価結果を「報告書」としてまとめ教員等に配布している。また、ホームページに公表している。
大阪教育大学	集計結果を各担当教員へ提示し、その結果を踏まえた改善方法等をアンケート形式により提出を求めている。
島根大学	教員の自主的な授業改善に役立てている。アンケートの結果を受けて、授業担当教員よりコメント（感想、授業改善等）を入力いただき Web もしくは冊子体にて学生にフィードバックを行っている。
熊本大学	独自の結果公開システムにより、各授業の結果データ（回答者別・質問項目別数値データの一覧表、各質問項目の回答率・平均・標準偏差・自由記述）、教員からの授業アンケート結果に対するコメント、成績評価結果に関するコメントを授業担当教員・受講者に対して Web 上で公開している（教員のコメントはシステム上で入力）。
了徳寺大学	各担当教員がアンケート集計結果に関してリフレクション・ペーパーを作成し学科長⇒学部長⇒学長に提出する。
山形県立保健医療大学	科目代表者より学生に向けたコメントを学内で公表している。
石巻専修大学	「学生による授業評価アンケート報告書」を作成し、学生に公開している。「教員の個別の集計結果と自由記述に対する教員の対応」を全担当教員についてまとめて教員に公開し、授業改善等の工夫を共有しようとしている。
東北文教大学	1. 授業改善アンケート集計結果に関するコメントと、2. 自由記述に関するコメントを「教員コメント」として提出し、学生・教職員に閲覧できるように公開している。
藤女子大学	1. 科目担当者名を除き、集計結果を公表している。2. 集計結果及びアンケート（自由記述）に対して、教員から意見・感想等を求め、授業改善等に努めている。

※授業フィードバックを求める際のフォーマット例

1）東北大学全学教育科目　授業実践記録

※関内隆他 2007「東北大学全学教育における授業実践・評価・改善サイクルの新たな取組」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 2 号を参照

授業科目名： 授業題目名： 実施年度セメスター：平成　　年度　　セメスター　　曜日　　講時 担当者氏名（代表）：
1　授業科目の目標（シラバス記載の学修到達目標等）
2　授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点
3　学生による授業評価結果概要と分析ならびにそれに対する意見
4　授業実践の成果（学生の学修態度や成績評価結果に関するコメントなど）
5　解決すべき課題や今後の改善策など

2）京都薬科大学　リフレクション・ペーパー

※第 9 回京都 FDer 塾（2010、http://www.kyoto-fd.jp/poster.html にて閲覧可能）ポスターセッションにおける京都薬科大学の報告「京都薬科大学における FD の取り組み」を参照

氏名	所属
講義名	
（1）授業を行うに当たって工夫した点	
（2）授業を行ってみて良かったと思う点	
（3）授業を行ってみて改善を要すると思う点	
（4）学生の授業アンケートの結果について思うこと	

授業アンケートの隔年実施と改善結果の可視化に関するＱ＆Ａ

問１　アンケートの全体の実施回数を減らすのであれば､アンケート実施授業科目を半分にして隔年で交互に調査をすることもあり得るのではないか。なぜアンケートを実施する年としない年とにしたのか。

答　「アンケート実施授業科目を半分にして隔年で交互に調査する」との案についても、教育企画委員会副委員長会議にて検討させていただきましたが、「全ての科目を同時期に同一設問を用いて調査する現行の授業アンケートシステムの長所は、今後も継続していくべき」（提案文書２頁２行目）との判断から、今回のような提案といたしました。

問２　フィードバックレポートの導入について､すでにアンケートを見て毎年少しずつ手直しをしてきた授業では、学生からの改善の声がほとんど出ていなくて、更新しにくい状況がある。一度レポートを書いてしまうと、冊子体として隔年に全教員配布するほどのものなのかがよくわからない。レポートの提出は全教員ノルマにしても、活用や閲覧の仕方は別な方法もあり得るように思う。

答　フィードバックレポート導入の第一の目的は、「教員や大学が授業アンケートの結果を真摯に受け止めていることを可視化する」（提案文書３頁24行目）ことにあります。すでに授業の手直しを進めてきた授業、学生からの改善の声が出ていない授業については、授業アンケートの「授業を通じて学んだこと」に関する自由記述に焦点を当てる等、学生の不満への対応に捉われない内容にて授業実践紹介を作成していただければと思います。また、授業実践紹介の「受講学生の声（授業アンケートの結果から)」の欄については、直近のアンケートの内容を反映していただく必要があるため、隔年での更新が必須となりますが、その他の部分については、大きな変更がなくても問題ありません。なお、第２サイクル（平成２９-３０年度）以降のフィードバックレポートの活用・閲覧の在り方については、第１サイクル（平成２７-２８年度）の実施状況を踏まえ、改めて検討する必要があるかと考えられます。

問３　フィードバックレポートの結果を冊子体で全教員に配布・共有しても、ほとんど見ないのではないか。

答　フィードバックレポート導入によって期待される効果のひとつに、「福島大学全体としての授業満足度は向上傾向にあるが、これらポジティブな成果をもたらす個別授業の工夫や改善を掘り起し、共有していくための基礎的な資料」（提案文書４頁１行目）としての役割があります。このような役割を実現すべく、フィードバックレポート作成に当たっては、見やすい、わかりやすい編集を心がけたいと思いますので、関心のある部分だけでも、目を通していただければ大変嬉しい限りです。なお、問２でもお答えした通り、第２サイクル（平成２９-３０年度）以降のフィードバックレポートの活用・閲覧の在り方については、第１サイクル（平成２７-２８年度）の実施状況を踏まえ、改めて検討したいと考えております。全教員への冊子体での配付の是非についても、第１サイクルでの活用状況を踏まえた上で見直しを図ることが必要かと考えます。

問４　授業アンケートの実施は、隔年ではなく、３年に１回の実施でも良いのではないか。

答　授業アンケートの隔年実施による効果のひとつとして、「授業時間を利用して行われる他の全学アンケート（共通教育アンケート等）についても、授業アンケートを実施しない年度に集中して実施する等の対策を併せて採ることで、学生のアンケート回答に対する負担を分散させること」が期待されます（提案文書３頁18行目)。授業を利用する全学アンケートのひとつに学生生活実態調査がありますが、この調査は４年に１度の実施が計画されております。その他の調査も含め、全学アンケートとの実施年度の重複を避けるために、授業アンケートについては隔年にて実施したく考えております。何卒、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

問５　隔年開講科目等については Live Campus の WEB アンケート機能を活用するとあるが、匿名性が確保されるのか。

答　Live Campus の「授業評価アンケート」機能を用いることで、学生の匿名性を確保することができます。なお現在も、教員側から希望のあった一部の科目では、Live Campus の「授業評価アンケート」を用いた学期途中でのアンケートを実施しておりますが、授業担当教員は、学生個人ごとの回答内容を見ることはできません。

問６　今後も全授業が対象なのか。特定授業を抽出しないのか。

答　大学全体としての改善状況を確認するうえで、「全ての科目を同時期に同一設問を用いて調査する現行の授業アンケートシステムの長所は、今後も継続していくべき」（提案文書２頁２行目）と考えております。授業アンケートの回答負担については、設問を簡略化するなどの措置を図ることで対応を進めてまいりました。今後も、工夫を続けていきたいと考えおります。

問７　授業アンケートが無記名であることが、人格攻撃等をされる原因だ。今後も無記名なのか。

答　教育企画委員会では、今回の提案とは別個に、「成績データ等の学修履歴と授業アンケートを結び付けて分析するための記名式授業アンケートの導入」（提案文書４頁下から５行目）を引き続き検討してまいります。記名式の導入に伴うメリットとともに、回答の正確性の担保や学生側の記載負担に関する懸念について調査と議論を重ねたうえで､来年度の前期中に改めて対応策を提案したいと考えております。なお、人格攻撃を含む回答については、授業改善に資するものではなく、授業アンケートの趣旨からも外れるものです。学生側が授業アンケートの趣旨を理解した上で、建設的な意見を回答するよう促す対策を、記名式アンケート導入の是非と併せて検討してまいりたいと考えます。貴重な御意見、ありがとうございました。

平成２６年７月実施
教育改善のための学生アンケート
前期開講科目実施状況

平成26年度前期　授業アンケート実施状況（分類毎）

大分類	中分類	小分類	全科目						10人以上の科目				10人未満の科目			
			対象科目数	回収科目数	回収率	受講者数	回答者数	回答率	科目数	受講者数	回答者数	回答率	科目数	受講者数	回答者数	回答率
自己デザイン領域	キャリア創造科目	○キャリア形成論	6	6	100.0%	954	806	84.5%	6	954	806	84.5%	0			
		○キャリアモデル学習	5	4	80.0%	957	511	53.4%	5	957	511	53.4%	0			
	キャリア創造計		11	10	90.9%	1,911	1,317	68.9%	11	1,911	1,317	68.9%	0			
共通領域	○総合科目		5	5	100.0%	647	539	83.3%	5	647	539	83.3%	0			
	広域選択科目	○人間と文化	7	6	85.7%	843	566	67.1%	7	843	566	67.1%	0			
		○社会と歴史	7	6	85.7%	606	430	71.0%	7	606	430	71.0%	0			
		○自然と技術	5	5	100.0%	473	337	71.2%	5	473	337	71.2%	0			
	○情報教育科目		8	8	100.0%	693	547	78.9%	8	693	547	78.9%	0			
	○健康・運動科目	健康・運動科学実習	23	19	82.6%	948	745	78.6%	23	948	745	78.6%	0			
		スポーツ実習	7	5	71.4%	82	62	75.6%	2	51	44	86.3%	5	31	18	58.1%
	○英語	英語AⅠ・AⅡ	40	32	80.0%	1,961	1,472	75.1%	40	1,961	1,472	75.1%	0			
		英語BⅠ・BⅡ	44	40	90.9%	1,920	1,503	78.3%	44	1,920	1,503	78.3%	0			
		応用英語Ⅰ	1	1	100.0%	13	13	100.0%	1	13	13	100.0%	0			
		応用英語Ⅱ	0										0			
		応用英語Ⅲ	1	1	100.0%	42	41	97.6%	1	42	41	97.6%	0			
		応用英語Ⅳ（※1）	0										0			
		応用英語Ⅴ	1	1	100.0%	14	11	78.6%	1	14	11	78.6%	0			
		応用英語Ⅵ	0										0			
		英語計	87	75	86.2%	3,950	3,040	77.0%	87	3,950	3,040	77.0%	0	0	0	
	非英外国語	○ドイツ語	15	15	100.0%	402	371	92.3%	10	375	350	93.3%	5	27	21	77.8%
		○フランス語	15	8	53.3%	428	200	46.7%	10	405	189	46.7%	5	23	11	47.8%
		○中国語	22	20	90.9%	652	621	95.2%	20	643	621	96.6%	2	9	0	0.0%
		ロシア語	4	4	100.0%	98	89	90.8%	4	98	89	90.8%	0			
		スペイン語	4	2	50.0%	64	55	85.9%	1	55	52	94.5%	3	9	3	33.3%
		韓国朝鮮語	2	2	100.0%	103	94	91.3%	2	103	94	91.3%	0			
		日本語（日本語）	2	2	100.0%	19	18	94.7%	1	10	10	100.0%	1	9	8	88.9%
		日本語（日本事情）	1	1	100.0%	12	12	100.0%	1	12	12	100.0%	0			
		非英計	65	54	83.1%	1,778	1,460	82.1%	49	1,701	1,417	83.3%	16	77	43	55.8%
	○共通計		214	183	85.5%	10,020	7,726	77.1%	193	9,912	7,665	77.3%	21	108	61	56.5%
専門領域	○人間発達文化学類		220	172	78.2%	8,536	5,871	68.8%	186	8,358	5,779	69.1%	34	178	92	51.7%
	○行政政策学類		35	25	71.4%	3,748	1,519	40.5%	34	3,741	1,512	40.4%	1	7	7	100.0%
	○経済経営学類		73	58	79.5%	6,126	3,797	62.0%	67	6,100	3,779	62.0%	6	26	18	69.2%
	○現代教養コース		38	28	73.7%	1,735	992	57.2%	38	1,735	992	57.2%	0			
	○共生システム理工学類		77	63	81.8%	5,050	3,121	61.8%	71	5,030	3,112	61.9%	6	20	9	45.0%
	○専門計		443	346	78.1%	25,195	15,300	60.7%	396	24,964	15,174	60.8%	47	231	126	54.5%
総計			668	539	80.7%	37,126	24,343	65.6%	600	36,787	24,156	65.7%	68	339	187	55.2%

※分類集計は、○の分類で行う。「ロシア語」、「スペイン語」、「韓国朝鮮語」、「日本語（日本語、日本事情）」は担当者が特定されるため分類集計は行わない。

※現代教養コースの共通領域科目は専門領域科目として扱っている。

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
自己デザイン領域	キャリア創造科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
キャリア形成論	-	-	954	806	84.5%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	227名	28.2%	2. 行政政策学類	186名	23.1%
3. 経済経営学類	221名	27.4%	4. 現代教養コース	0名	0%
5. 共生システム理工学類	163名	20.2%	6. 教育学部	2名	0.2%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	7名	0.9%	合計	806名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	791名	98.1%
2. 2年	1名	0.1%
3. 3年	4名	0.5%
4. 4年	2名	0.2%
5. 5年以上	3名	0.4%
未 未記入・無効	5名	0.6%
合計	806名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	517名	64.1%
2. 2/3以上出席した	271名	33.6%
3. 半分以上出席した	9名	1.1%
4. 出席は半分未満だった	1名	0.1%
未 未記入・無効	8名	1%
合計	806名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	7名	0.9%
4. かなりそうだと言える	2名	0.2%
3. どちらとも言えない	20名	11.8%
2. あまりそうとは言えない	34名	4.2%
1. いいえ	135名	16.7%
未 未記入・無効	608名	0.5%
合計	806名	100%
評価ポイント平均値	**1.55**	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	391名	48.5%
4. かなりそうだと言える	292名	36.2%
3. どちらとも言えない	105名	13%
2. あまりそうとは言えない	6名	0.7%
1. いいえ	8名	1%
未 未記入・無効	4名	0.5%
合計	806名	100%
評価ポイント平均値	**4.31**	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	391名	48.5%
4. かなりそうだと言える	282名	36.2%
3. どちらとも言えない	100名	12.4%
2. あまりそうとは言えない	12名	1.5%
1. いいえ	7名	0.9%
未 未記入・無効	4名	0.5%
合計	806名	100%
評価ポイント平均値	**4.31**	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	376名	46.7%
4. かなりそうだと言える	304名	37.7%
3. どちらとも言えない	102名	12.7%
2. あまりそうとは言えない	10名	1.2%
1. いいえ	10名	1.2%
未 未記入・無効	4名	0.5%
合計	806名	100%
評価ポイント平均値	**4.28**	

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
共通領域・共通教育	キャリア創造科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
キャリアモデル学習	-	-	957	511	53.4%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	282名	55.2%	2. 行政政策学類	0名	0%
3. 経済経営学類	84名	16.4%	4. 現代教養コース	2名	0.4%
5. 共生システム理工学類	141名	27.6%	6. 教育学部	1名	0.2%
7. 行政社会学部	1名	0.2%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	0名	0%	合計	511名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	1名	0.2%
2. 2年	493名	96.5%
3. 3年	8名	1.6%
4. 4年	6名	1.2%
5. 5年以上	3名	0.6%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	511名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	314名	61.4%
2. 2/3以上出席した	184名	36%
3. 半分以上出席した	11名	2.2%
4. 出席は半分未満だった	1名	0.2%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	511名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	11名	2.2%
4. かなりそうだと言える	8名	1.6%
3. どちらとも言えない	15名	9.6%
2. あまりそうとは言えない	40名	7.8%
1. いいえ	137名	26.8%
未 未記入・無効	300名	0%
合計	511名	100%
評価ポイント平均値	1.65	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	278名	54.4%
4. かなりそうだと言える	159名	31.1%
3. どちらとも言えない	63名	12.3%
2. あまりそうとは言えない	6名	1.2%
1. いいえ	5名	1%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	511名	100%
評価ポイント平均値	4.37	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	289名	56.6%
4. かなりそうだと言える	150名	29.4%
3. どちらとも言えない	53名	10.4%
2. あまりそうとは言えない	13名	2.5%
1. いいえ	6名	1.2%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	511名	100%
評価ポイント平均値	4.38	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	284名	55.6%
4. かなりそうだと言える	163名	31.9%
3. どちらとも言えない	51名	10%
2. あまりそうとは言えない	7名	1.4%
1. いいえ	6名	1.2%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	511名	100%
評価ポイント平均値	4.39	

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
共通領域・広域選択科目	広域選択科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
人間と文化	-	-	843	566	67.1%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	175名	30.9%	2. 行政政策学類	70名	12.4%
3. 経済経営学類	200名	35.3%	4. 現代教養コース	1名	0.2%
5. 共生システム理工学類	116名	20.5%	6. 教育学部	3名	0.5%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	1名	0.2%	合計	566名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	448名	79.2%
2. 2年	47名	8.3%
3. 3年	37名	6.5%
4. 4年	24名	4.2%
5. 5年以上	10名	1.9%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	566名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	310名	54.8%
2. 2/3以上出席した	227名	40.1%
3. 半分以上出席した	22名	3.9%
4. 出席は半分未満だった	5名	0.9%
未 未記入・無効	2名	0.4%
合計	566名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	7名	1.2%
4. かなりそうだと言える	11名	1.9%
3. どちらとも言えない	31名	7.6%
2. あまりそうとは言えない	79名	14%
1. いいえ	213名	37.6%
未 未記入・無効	225名	0%
合計	566名	100%
評価ポイント平均値	1.59	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	298名	52.7%
4. かなりそうだと言える	198名	35%
3. どちらとも言えない	60名	10.6%
2. あまりそうとは言えない	6名	1.1%
1. いいえ	4名	0.7%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	566名	100%
評価ポイント平均値	4.38	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	305名	53.9%
4. かなりそうだと言える	193名	34.1%
3. どちらとも言えない	59名	10.4%
2. あまりそうとは言えない	6名	1.1%
1. いいえ	3名	0.5%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	566名	100%
評価ポイント平均値	4.40	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	277名	48.9%
4. かなりそうだと言える	203名	35.9%
3. どちらとも言えない	68名	12%
2. あまりそうとは言えない	11名	1.9%
1. いいえ	5名	0.9%
未 未記入・無効	2名	0.4%
合計	566名	100%
評価ポイント平均値	4.30	

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
共通領域	広域選択科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
社会と歴史	-	-	606	430	71.0%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	88名	20.5%	2. 行政政策学類	165名	38.4%
3. 経済経営学類	112名	26%	4. 現代教養コース	0名	0%
5. 共生システム理工学類	63名	14.7%	6. 教育学部	0名	0%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	2名	0.5%	合計	430名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	375名	87.2%
2. 2年	28名	6.5%
3. 3年	16名	3.7%
4. 4年	10名	2.3%
5. 5年以上	0名	0%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	430名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	222名	51.6%
2. 2/3以上出席した	166名	38.6%
3. 半分以上出席した	24名	5.6%
4. 出席は半分未満だった	14名	3.3%
未 未記入・無効	4名	0.9%
合計	430名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	6名	1.4%
4. かなりそうだと言える	5名	1.2%
3. どちらとも言えない	34名	5.8%
2. あまりそうとは言えない	61名	14.2%
1. いいえ	146名	34%
未 未記入・無効	178名	0.2%
合計	430名	100%
評価ポイント平均値	1.67	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	228名	53.3%
4. かなりそうだと言える	143名	33.3%
3. どちらとも言えない	45名	10.5%
2. あまりそうとは言えない	7名	1.6%
1. いいえ	5名	1.2%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	430名	100%
評価ポイント平均値	4.36	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	252名	58.6%
4. かなりそうだと言える	134名	31.2%
3. どちらとも言えない	30名	7%
2. あまりそうとは言えない	7名	1.6%
1. いいえ	6名	1.4%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	430名	100%
評価ポイント平均値	4.44	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	244名	56.7%
4. かなりそうだと言える	141名	32.8%
3. どちらとも言えない	33名	7.7%
2. あまりそうとは言えない	6名	1.4%
1. いいえ	5名	1.2%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	430名	100%
評価ポイント平均値	4.43	

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
共通領域	広域選択科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
自然と技術	-	-	473	337	71.2%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	63名	18.7%	2. 行政政策学類	55名	16.3%
3. 経済経営学類	89名	26.4%	4. 現代教養コース	0名	0%
5. 共生システム理工学類	130名	38.6%	6. 教育学部	0名	0%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	0名	0%	合計	337名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	276名	81.9%
2. 2年	36名	10.7%
3. 3年	16名	4.7%
4. 4年	5名	1.5%
5. 5年以上	4 名	1.2%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	337名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	199 名	59.1%
2. 2/3以上出席した	117名	34.7%
3. 半分以上出席した	13名	3.9%
4. 出席は半分未満だった	6名	1.8%
未 未記入・無効	2名	0.6%
合計	337 名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	6名	1. 8%
4. かなりそうだと言える	7名	2.1%
3. どちらとも言えない	42名	11. 3%
2. あまりそうとは言えない	71名	21.1%
1. いいえ	123名	36. 5%
未 未記入・無効	88名	0%
合計	337名	100%
評価ポイント平均値	1.80	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	155名	46%
4. かなりそうだと言える	120名	35.6%
3. どちらとも言えない	53名	15.7%
2. あまりそうとは言えない	6名	1.8%
1. いいえ	3名	0.9%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	337名	100%
評価ポイント平均値	4.24	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	157名	46.6%
4. かなりそうだと言える	115名	34.1%
3. どちらとも言えない	46名	13.6%
2. あまりそうとは言えない	14名	4.2%
1. いいえ	5名	1.5%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	337名	100%
評価ポイント平均値	4.20	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	155名	46%
4. かなりそうだと言える	120名	35.6%
3. どちらとも言えない	47名	13.9%
2. あまりそうとは言えない	12名	3.6%
1. いいえ	3名	0.9%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	337名	100%
評価ポイント平均値	4.22	

平成25年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類	分野
共通領域	情報教育科目

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
情報教育科目	-	-	693	547	78.9%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	204名	37.3%	2. 行政政策学類	130名	23.8%
3. 経済経営学類	114名	20.8%	4. 現代教養コース	0名	0%
5. 共生システム理工学類	93名	17%	6. 教育学部	1名	0.2%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	5名	0.9%	合計	547名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	530名	96.9%
2. 2年	5名	0.9%
3. 3年	5名	0.9%
4. 4年	2名	0.4%
5. 5年以上	4名	0.7%
未 未記入・無効	1名	0.2%
合計	547名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	369名	67.5%
2. 2/3以上出席した	170名	31.1%
3. 半分以上出席した	6名	1.1%
4. 出席は半分未満だった	2名	0.4%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	547名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	7名	1.3%
4. かなりそうだと言える	5名	0.9%
3. どちらとも言えない	20名	12.4%
2. あまりそうとは言えない	53名	9.7%
1. いいえ	140名	25.6%
未 未記入・無効	322名	0%
合計	547名	100%
評価ポイント平均値	1.60	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	272名	49.7%
4. かなりそうだと言える	172名	31.4%
3. どちらとも言えない	77名	14.1%
2. あまりそうとは言えない	19名	3.5%
1. いいえ	7名	1.3%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	547名	100%
評価ポイント平均値	4.25	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	279名	51%
4. かなりそうだと言える	168名	30.7%
3. どちらとも言えない	80名	14.6%
2. あまりそうとは言えない	14名	2.6%
1. いいえ	6名	1.1%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	547名	100%
評価ポイント平均値	4.28	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	267名	48.8%
4. かなりそうだと言える	181名	33.1%
3. どちらとも言えない	75名	13.7%
2. あまりそうとは言えない	17名	3.1%
1. いいえ	7名	1.3%
未 未記入・無効	0名	0%
合計	547名	100%
評価ポイント平均値	4.25	

平成26年7月実施

教育改善のための学生アンケート

学類
共通領域

科目名	アンケートコード	担当教員	受講者数	回答者数	回答率
健康・運動科目	-	-	1030	807	78.3%

Ⅰ.

(1) 学部

1. 人間発達文化学類	280名	34.7%	2. 行政政策学類	200名	24.8%
3. 経済経営学類	167名	20.7%	4. 現代教養コース	0名	0%
5. 共生システム理工学類	154名	19.1%	6. 教育学部	0名	0%
7. 行政社会学部	0名	0%	8. 経済学部	0名	0%
未 未記入・無効	6名	0.7%	合計	807名	100%

学年(入学してからの年数)

1. 1年	451名	55.9%
2. 2年	3名	0.4%
3. 3年	6名	0.7%
4. 4年	38名	4.7%
5. 5年以上	3名	0.3%
未 未記入・無効	306名	37.9%
合計	807名	100%

Ⅱ. この授業についてあなた自身の取り組みについておたずねします。

(2) この授業にどのくらい出席しましたか。

1. 毎回出席した	599名	74.2%
2. 2/3以上出席した	193名	23.9%
3. 半分以上出席した	6名	0.7%
4. 出席は半分未満だった	2名	0.2%
未 未記入・無効	7名	0.9%
合計	807名	100%

Ⅲ. この授業及び担当教員に関して、次の(5)～(7)の項目について評価ポイント5～1のいずれかの数字で答え、その理由をお書きください。

(4) 教員の授業に対する姿勢はよかったですか。

5. はい	30名	3.7%
4. かなりそうだと言える	13名	1.6%
3. どちらとも言えない	22名	3.8%
2. あまりそうとは言えない	30名	3.7%
1. いいえ	118名	14.6%
未 未記入・無効	594名	0.1%
合計	807名	100%
評価ポイント平均値	2.09	

(5) 教育の方法は適切でしたか。

5. はい	580名	71.9%
4. かなりそうだと言える	173名	21.4%
3. どちらとも言えない	40名	5%
2. あまりそうとは言えない	6名	0.7%
1. いいえ	7名	0.9%
未 未記入・無効	1名	0.1%
合計	807名	100%
評価ポイント平均値	4.63	

(6) 授業の内容は適切でしたか。

5. はい	586名	72.6%
4. かなりそうだと言える	166名	20.6%
3. どちらとも言えない	42名	5.2%
2. あまりそうとは言えない	6名	0.7%
1. いいえ	6名	0.7%
未 未記入・無効	1名	0.1%
合計	807名	100%
評価ポイント平均値	4.64	

(7) 総合的にみてこの授業に満足しましたか。

5. はい	604名	74.8%
4. かなりそうだと言える	158名	19.6%
3. どちらとも言えない	30名	3.7%
2. あまりそうとは言えない	8名	1%
1. いいえ	6名	0.7%
未 未記入・無効	1名	0.1%
合計	807名	100%
評価ポイント平均値	4.67	